



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	プロスポーツと「地域発展」：アメリカにおける経験的・理論的研究
Author(s)	大沼, 義彦; ONUMA, Yoshihiko; 長津, 詩織 他
Citation	北海道大学大学院教育学研究科紀要, 101, 117-147
Issue Date	2007-03-30
DOI	https://doi.org/10.14943/b.edu.101.117
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/20489
Type	departmental bulletin paper
File Information	101_117-147.pdf



プロスポーツと「地域発展」

—— アメリカにおける経験的・理論的研究 ——

大沼義彦*・長津詩織**

Professional sport and “community development”: The empirical and theoretical sport studies in America

Yoshihiko ONUMA and Shiori NAGATSU

【要旨】本稿の目的は、アメリカ・マイナーリーグ研究 (Johnson 1995), 及びプロスポーツとコミュニティ研究 (Ingham, et al.1987; Ingham & McDonald 2003; Smith & Ingham 2003) を通じ、プロスポーツと「地域発展」の関係を検討することである。そこでは、ポスト・フォードイズム下におけるプロスポーツとコミュニティの変容といった分析枠の中で、公共/民間セクターの相互浸透による政治的エコノミーの動態、市民的儀礼によって示される社会構造とプロスポーツ・イデオロギーの関係、プロスポーツ関連都市開発における住民意識と優先順位の問題が指摘された。そしてここから、プロスポーツはコミュニティに対して統合的に働くよりも、その格差を拡大させる懸念が大きいことが示唆された。しかし、日本での文脈に即していえば、コミュニティとスポーツ・アソシエーション論、親密な公共性論、NPO論等との接合、さらに(プロ)スポーツとコミュニティの質的動態(例えば社会関係資本)との関連を深く把握していく課題も残された。

【キーワード】プロスポーツ、マイナーリーグ、コミュニティ、地域発展、市民的儀礼

1 はじめに

1993年のJリーグ発足以降、プロスポーツと都市、または地域社会との結びつきが強調されるようになった。それは、従来の学校や企業を中心とした日本のスポーツシステムの大きな転換とも見て取れる事態であった。札幌市においても、「コンサドーレ札幌」が設立され(1996年)、また2004年シーズンからプロ野球の日本ハム球団も札幌に本拠地を構えた。そして2006年、「北海道日本ハムファイターズ」は日本シリーズに勝利し、この「道民球団」の快挙は15万人を超える多くの市民によって祝福された(北海道新聞 2006年11月18日夕刊)¹。

こうした都市や地域におけるプロスポーツチームや独立リーグ設立の動きは、近年全国的にも広がり、加熱してきているかのように見受けられる。そこではプロスポーツと「地域振興」や「地域発展 (community development)」が継ぎ目なく、より順接的に結びつけられてきていると思われる。

本稿の目的は、以上のプロスポーツと「地域発展」の関係を考察することにある。すでにこ

* 北海道大学大学院教育学研究科健康スポーツ科学講座助教授 (体育計画 [体育社会学] 研究グループ)

**北海道大学大学院教育学研究科健康スポーツ科学講座修士課程 (体育計画 [体育社会学] 研究グループ)

れらについては、肯定的・批判的見解を含む諸研究が蓄積されてきた（大沼 2006）。なかでも、アメリカの経験的理論的研究は、豊富な内容を提示しており、本稿においてもこれらを参照・検討することが中心的作業となる。

そこでまず始めに、都市とプロスポーツやイベント研究の簡単な整理を行い、本稿で取り上げる Author T. Johnson や Alan G. Ingham²の研究史上の位置について確認する。次に、アメリカ・マイナーリーグ研究（Johnson）における諸論点について検討を行う。同研究は、「スポーツによる地域再開発論の機能論的諸研究」（松村 2006：11）と評されるが、それはまた日本の状況を考える上でも豊富な事例を提供しているといつてよい³。そしてこうした経験的な了解の上に立って、Inghamの諸論考が検討される。これらは、多様に展開するプロスポーツとコミュニティ関係の理論的研究の発端に位置し、かつスポーツ社会学研究として本格的に取り組みられたものである。本稿のねらいは、彼の理論的展開を振り返り、そのパースペクティブの広がりや深さを再確認することにある⁴。

2 都市とプロスポーツ，メガ・イベント研究小史

プロスポーツやメガ・イベントに関する研究は、都市社会学をはじめ、経済学、地理学、観光学、スポーツ社会学、自治体行政研究等、幅広い関心を集めてきた。ここでは、スポーツ研究を中心に、その研究史を素描してみたい（図参照）。

まず、その発端に位置するのが、Ingham, et al. (1987)である。これは、スポーツ社会学研究としてなされたものであった。

ほぼ同時期において注目されるのが、イベント (Hall 1992) や観光研究 (Roche 1992) である。いずれも都市とイベント（スポーツを含む）との関係を主題としていたが、それらは、都市におけるイベントが社会的にも経済的にもいつも積極的役割を果たすものではないことを示していた。わけても、従来考えられていたイベントの経済効果への批判 (Baade & Dye 1988；1990) は大きく、これら諸研究は政治的、文化的諸問題を含む、幅広い分析の必要を強く示唆した。

こうした研究関心は、本稿でも取り上げるマイナーリーグ研究 (Johnson 1995) にも反映され、とくに行政と民間事業者達の有り様を通じた都市の政治的エコノミー (political economy) が分析された。さらにプロスポーツやメガ・スポーツイベント研究においては、上記の影響に加え、いわゆる新都市社会学に触発された研究が蓄積されることになる (Whitson & Macintosh 1993；Essex & Chalkley 1998；Heitzman 1999；Row & McGuirk 1999；Bélanger 2000；Friedman, et al. 2004；Silk 2004)。これら研究の特徴は、メガ・スポーツイベント開催が社会的統合よりむしろ、社会的分離を引き起こすことを強調し、いわば「闘争のアリーナ」としてイベントを記述していく点にある。彼らの前景をなしているのは、フォーディズムからポスト・フォーディズム、ポスト・モダンへと移行する都市の姿そのもの（階級、人種、エスニシティ、ジェンダー、社会関係の動態）であり、かつそこに投影されるプロスポーツやイベントということになる。さらにこうした主題が、より分節化された問題圏域を生じさせていったことも重要である。その一つが、スポーツと空間 (Puig & Ingham 1993；Van Ingen 2003；Tomlinson, et al. 2003；Jarvie 2004) であり、もう一つがスポーツと権力（ヘゲモニー） (Schimmel, et al. 1993；Henry & Paramio-Salcines 1999；Schimmel 2001) であった。

3 「地域発展」計画におけるプロスポーツの位置づけ

——アメリカ・マイナーリーグ野球の事例を参考にして——

現在、日本のプロスポーツでは「地域密着」への注目が高まっている。チームが経営のために地域に働きかけるのは当然であろう。一方、ホームタウンとなった地域社会にとってチームの存在がプラスの効果をもたらすという言説もみられるが、そうした楽観的な見方に対する疑義も提出されている。しかし、具体的な「地域」、つまり自治体、住民、企業の視点に立った実証的分析は十分とはいえない。

本節では、「地域発展」計画におけるプロスポーツチームの存在意義をArthur T. Johnsonの著書“Minor League Baseball and Local Economic Development”を参考に考察する。ここでの事例研究は、スタジアム建設の舞台となるまちの自治体、企業、住民の動きから、関係者がチームやスタジアムをそれぞれの目的のために利用する方法と、それがもたらすものを明らかにする。また、マイナーリーグチームはメジャーリーグチームよりも地域に近い存在であり、事例から得られるチームと地域の関係は、日本でのあり方にも示唆を与えるものと考えている。

なお、以下の文章中のページ数（括弧内数字）は、特記がない限り全て“Minor League Baseball and Local Economic Development”の引用・参照である。また、地名の後に州名の略称を括弧書きで付記してあるが、それらは全て同書の表記に従っている。

3-1 マイナーリーグ概要と事例地域の特徴

日本人選手の活躍をきっかけに、近年ではアメリカ野球に関する情報が多く報道されるようになったが、メジャーリーグについてある程度の知識をもっていてもマイナーリーグはまだ馴染みがない人が多いであろう。最初に、アメリカ・マイナーリーグ野球（Minor League Baseball：MiLB）について簡単に紹介する。

①構成、チーム数、PBA

メジャーリーグの下部リーグにあたるマイナーリーグには、Triple-A、Double-A、Class-A、ルーキーリーグの4段階が存在する（表参照）。メジャーリーグと同様に地区リーグがあり（アメリカ国外も含む）、Triple-Aには4つ、Double-Aは3つである。Class-Aとルーキーリーグはさらに複雑で、レギュラーシーズンの半分の試合数で行われるシーズンリーグもある。こうした全てのチームを合わせると、調査時の1992年現在でTriple-AからClass-Aまでで134チーム、ルーキーリーグは18チームであった⁵。試合数はレギュラーシーズンで概ね142試合である。地区リーグはそれぞれ縮小傾向にあるが、それは遠征費の削減が目的とされる（11）。

メジャーリーグとマイナーリーグとの間にはPBA（Professional Baseball Agreement）という契約が結ばれている（10）。そこでは、メジャーとマイナーの間の財政、選手、チームの守備区域（territories）⁶などについて詳細に決定され、数年ごとに再交渉が行なわれる。原則的にリーグごとの独立経営ではあるが、マイナーリーグの経営においてメジャーリーグからの補助金は重要な地位を占めており、したがってメジャーが財政難になった場合必然的にマイナーの経営も厳しくなる（29-30）。

②オーナー

マイナーリーグチームのオーナーは、個人資産家、非営利団体、地方自治体、株主によって

表 アメリカ・マイナーリーグ野球の構成

Triple-A	International League(14)	Mexican League(16)	Pacific Coast League(16)		
Double-A	Eastern League(12)	Southern League(10)	Texas League(8)		
Class-A Advanced	California League(10)	Carolina League(8)	Florida State League(12)		
Class-A	Midwest League(12)	South Atlantic League(16)			
Class-A Short Season	New York-Penn League(14)	Northwest League(8)			
Rookie	Appalachian League(10)	Arizona Summer League(9)	Gulf Coast League(13)	Pioneer League(8)	Venezuelan Summer League(21)

Minor League Baseball 公式ホームページより作成。カッコ内はチーム数。全て2006年時点でのデータである。

構成された地域住民団体、メジャーリーグチームなど様々である（19-20）。あるメジャーリーグチーム傘下であったとしても、そのチームがマイナーリーグチームのオーナーであるとは限らない。

③移転

マイナーリーグチームが移転するのは珍しいことではない。PBAではフランチャイズが「地域の強い結びつきによって所有され」、オーナーは「現在の場所での安定を維持することについて強い関心」を持つことを要求しているが(20)、実際には1987年から1992年までの5年間で35チームの移転が行われた(35)。ICMA (International City Management Association) の調査によると、40%以上の地域が移転を脅しにしてチームの要求を突きつけられたことがあるが、財政的コストを考慮に入れても、86.2%の地域がチームを保持することを希望すると断言している(27-28)。この結果は、マイナーリーグのフランチャイズ地域は娯楽施設も持たないような中小規模の自治体であり、野球は重要な娯楽機会であることの反映である(28)。

④観客動員

1950年代から1960年代、マイナーリーグは観客動員面で苦戦を強いられたが、チームによる差はあるものの近年は増加傾向にある。この時期にファンの関心が失われた要因の一つとして、メジャーリーグのフランチャイズやテレビ中継がマイナーリーグの守備区域にも広がったこと、そして野球以外のレジャーの拡大が考えられる(13)。経営者の話によると、観客数を惹きつける方法として、野球よりもエンタテインメントの側面に力を入れているという(13)。

⑤事例地域

フランチャイズ地域は、人口規模でいえば日本の中規模都市から村レベルである。概ねリーグレベルが高いほど人口規模も大きい。本拠地のスタジアムは95%以上が自治体の所有である。頻繁な移転を視野に入れてのことと思われるが、チームとスタジアムの貸借権契約は5年以内が7割と短期の傾向にある(26)。

事例となった15の地域は、1970年代に産業衰退を経験したいわゆる‘rust belt’である。マイナーリーグチームとの関わりは、長期間あるいはかつてチームがあった、もしくは全く関連がなかったなど様々であるが、いずれも産業復興のある段階でチームが大きく関わっている。また、フランチャイズを移したチームは観客動員面で成功していることが多いことにも注目しておきたい。

⑥本書の論点

しかしながら、Johnsonの論点は、チームそのものの成功ではなく、チームの存在、より具体的にはスタジアムの建設が地域開発にどのように寄与したかという点にある。それは、観客動員のような人々の「熱狂」とは別の側面に光を当てるものである。したがって、以下ではJohnsonの主要な議論である次の三点を検討する。すなわち、①中心市街地再活性化と土地開発、②都市イメージの向上、③生活の質の向上、である。

3-2 中心市街地再活性化と土地開発

チームの移転や球場建設が起こった時に必ずといっていいほど話題になるのは、球場周辺地域を中心とした（経済）活性化である⁷。主に商業関係の住民達がスタジアム等を利用して活性化を図ることもしばしばあるが、球場の新築、移転、改修それ自体が活性化の「錨になる」(anchor)とみなされることもある(175)。例えばDurham (N.C.)ではスタジアム新築の際に3ヵ所が候補としてあがったが、そのうちもっとも中心街活性化に寄与する場所が地元当局者の本命となった(205-207)。

しかしながら、プロスポーツチームやイベントの経済効果予測が疑わしいことはすでに多くの研究者によって指摘されていた⁸。Johnsonの立場も同様で、Fort Wayne (Ind.)の事例ではベーシック・トレード・エリア(BTA)を用いて経済効果予測を詳細に検討した結果、Fort Wayneのマイナーリーグチームへの投資は効果をもたらさないと結論づけた(48)。その理由は、マイナーリーグのフランチャイズ都市が比較的小規模であるため、チームがもたらす便益を十分生かせる環境にないからであった(32)。そうであるならば、自治体やその他の関係者がチーム誘致やスタジアム建設に熱心になるには何か別の目的があると考えられる。

彼らの目的の一つは土地取引である、とJohnsonは述べる。Hoover (Ala.)は新球場の建設と工業団地造成を結びつけると同時に、土地の新開発、敷地の増大や高校建設地の獲得という目的の下に交渉が進められた。市とディベロッパー、不動産会社が一体となったこの事例では、チームの経営は厳しいものの、郊外にある大型ショッピングモールがスタジアムへの投資を補って余りあるほどの域外収入をもたらしていた(223-232)。Colorado Springs (Colo.)でのスタジアム建設も大規模な住宅開発の錨として利用されたものの、住宅開発を行っていた業者が倒産したため、スタジアム周辺は空き地になってしまった(240)。こうしたスタジアム建設と土地取引の関連が最も顕著に現れた例がCharlotte (N.C.)とYork County (S.C.)である。Charlotteにあったチームの新たなオーナーは100~150万ドル規模のスタジアム建設を要求したが、それに応える近隣自治体はほとんどなく、唯一応じたYork Countyにチームを移転させた(125-127)。移転先でオーナーは、地主と直接契約を結び、スタジアムを自分で建設する代わりに自治体には周辺インフラの整備を要求した(218-220)。つまり、インフラを整備することによって地価を上げることを目的とした、というものである。

Hallは、優良観光イベントに関して「あからさまにも、暗黙のうちにも、政治的出来事である」(ホール 1996:101)と指摘したが、このことは上記の事例においても同様であろう。関係者によって作られる「政治的風土」(176)はスタジアム交渉において重要なものとなり、「スタジアムやコンセッション(球場内の小売店)に投資するぐらいなら移転してほしい」(118)と当局者が考えるならば、交渉は成功しない。「交渉の場では、政治的関心を犠牲にすることなしにオーナーを満足させる調停方法を創造する必要がある」(119)。

地域にチームを誘致しスタジアムを建設することに関して、事例からは土地取引以外に大きく分けて二つの目的が読み取れる。それは、都市イメージ向上と生活の質の向上である。

3-3 都市イメージの向上

先に述べた通り、マイナーリーグチームを誘致する自治体は多くが小規模である。事例に登場した関係者は、彼らの地域が印象に残らないまちであると認識していたり、経済衰退時期に定着してしまったマイナスのイメージに苦しんでいた(250)。彼らにとって、チームは地域のイメージを宣伝する手段となり得るものである。

地域のイメージを宣伝する対象には、二つの要素があげられる(250)。一つは外部の人々である。前出のHooverに建設されたスタジアムは“Hoover Metropolitan Stadium”と名づけられ、当局者を大いに満足させた。Birminghamの近隣に位置するHooverは、「大都市圏の一地域」ではなく具体的に大都市圏に寄与することを望み、それによって地域を特徴づけようとしたのである(231)。同様に、近隣二都市と比較され「かわいそうないところ」と呼ばれていたDurhamもチームの存在による差別化を図った(201)。ところが、逆のイメージを「宣伝」してしまうこともある。Old Orchard Beach (Maine)は森の中にスタジアムを建設したが、そこは非常に寒く蚊や霧にも苦しめられ、他にも不運な出来事が続いてチームは移転してしまった。その後はコンサート会場として有名になり、スタジアムであった時よりもよい興行となったが、“field of screams” “best little ballpark”というイメージが定着したために野球チームからは敬遠されるようになってしまった(144-153)。また、「メジャー」ではない低いレベルのチームを持つことで二流の印象になることを恐れる都市もあった(251)。

一方、地域のイメージは地域住民に対しても宣伝される。当局者は、チームの存在や活躍によって住民が地域に対して前向きな態度を持ってくれることを望んでいる(250)。確かに事例となったチームでは驚くほどの観客動員を記録し、応援に後押しされるようにすばらしい成績を残すチームもあった。その様子は、おそらく「地域密着」と呼ばれるものであろう。しかしながら、こうした効果はチームへのものであって、地域に対する効果ではない。イメージの世界から降りて具体的な地域社会や住民に目を向けると、その効果は不可解なものとなるという。

3-4 生活の質の向上

繰り返しになるが、マイナーリーグを持つ地域の多くは、映画館などの他の娯楽施設を持たないため、試合は重要な娯楽の機会である。「レクリエーションは地域の生活の質という面で重要な構成要素となる」(251)。だが、「本当の意味でスタジアムが地域の構成要素となる目的を達成した事例はない」(252)。

Johnsonも注目したJudd & Parkinson (1989)は、ホワイトカラー層や裕福な自営業者層のための娯楽設備の建設は、その周辺にいる低所得者層への利益にはならないと指摘する(6)。

その例としてIndianapolis (Ind.) とHarrisburg (Pa.) があげられる。Indianapolisは以前からアマチュアスポーツが盛んな都市であったが、「10年に一度起こるかもしれないエピソード」(69)をもたらしものとして、マイナーリーグチームのスタジアムに長年投資してきた。しかしながら、それはアマチュアスポーツを中心とする地域総合計画とは矛盾するものだった。よって福祉部門は財源不足に陥り、乳児死亡率が全米トップ10となって以降は、社会サービスを重視する政策へと転換した⁹(75-77)。一方Harrisburgでは、シティアイランドと呼ばれる地区の開発の目玉としてスタジアムを建設した。チームとスタジアムは再開発の象徴となったが、市の当局者が主張する低所得者層の雇用促進が図られたかどうかは確認されていないという(180-185)。

ここで注意しなければならないのは、スタジアム建設にあたって、自治体は多くの場合住民の存在を遠ざけようとするものである。Friden & Sagalyn (1989)によると、「開発計画は、住民を脅かさない場所を見つけ、予算外の資金を利用することで再開発への抵抗を避けることを学習している」(248-252)。予算外の資金、つまり特別決定による公債の発行には有権者の承認を必要としないものもあり、当局者はスタジアム建設にかかる費用をこれによって捻出するのである¹⁰。実際にDurhamでは、住民投票にかけると失敗する可能性があることを認識しながら、有権者の承認が必要ない証券を発行した(209)。同様の公債の発行はHooverでも見られた(227)。

さらに、チームがもたらす「地域の一体感」のようなものへの疑いも示される。Fresno (Calif.) は中心市街地活性化の一環として球場建設計画を開始し、コミュニティ強化特別委員会は「地域の文化アイデンティティを構築するためにスタジアムが必要」と結論づけた(140-141)。しかし、「野球スタジアムの建設は熱狂的な野球ファンにとってのみ重要な問題であり、チームはそれほど人気がないという人もいた」¹¹(141)。マイナーリーグチームを持つと同時にメジャーリーグチームのキャンプ地でもあったFort Lauderdale (Fla.) では、観光客を惹きつけ、市民のプライドや一体感といった不可解な効果を生み出し、冬の訪問者や住民のためのアメニティを提供するために野球に投資し続けた(170)。この事例のように低成長の地域では、「野球という賭けで競争し続ける価値があるかどうか再評価しなければならない」(171)。結果として、オーナーの度重なる要求に当局者が応えきれなくなり、地域はチームとキャンプを失ってしまった。

こうした事例を検討すると、「人々の大多数は、マクロレベルでの評価では、イベントの受益者であり、生活の質も向上するが、ミクロレベルでは精神的出費で傷つく地域社会住民に対する懸念を、はっきりと提起する必要がある」というHallの指摘(ホール 1996: 100)の持つ意味が理解されよう。本書では住民に対する調査を行っていないため、彼らがどのような反応を示したか、微視的な動きは知ることができない。それでも、チームの成功の裏で起こった自治体当局者やデイベロッパー、オーナーの動きを追うことによって、その隙間から置き去りにされた住民の姿を窺うことは、決して不可能ではない。

3-5 Johnsonの結論

調査から得られたものを、Johnsonは以下のようにまとめている(243-253)。マイナーリーグチームは地域経済に大きく寄与はしないが、開発機能を有する。スタジアム建設に際した場所選定では再開発や新開発と結びつけられ、公共/民間の協力が図られる。しかし、波及効果が

期待できるような施設は犠牲も大きいものとなるだろう。このように政治が「スタジアムの成功を極端に価値づける」ようになる背景にあるのは、都市間競争とそれに伴う都市イメージ戦略である。「マイナーチームは地域を宣伝するのに利用され、新球場は他の観衆に前向きな合図を売り込むものである」。当局者はスタジアムへの投資を他の娯楽施設と同様に認識しており、試合が夏季限定でもあることから、他のイベントにも使用できる多目的スタジアムを好むが、オーナーは多くの場合専用スタジアムを要求する。両者の交渉の中から生まれた「スタジアムが地域の構成要素となるという目的を達成した事例はない」。最終的な結論として、「シーズンオフ期間にスタジアムを利用するならば、地域の生活の質を高めるだけでなく、スタジアムの経済開発機能の最大化もなされるだろう。マイナーリーグが『価値あるもの』という確信の鍵は、スタジアムがその両方を持つことである」(253)と述べられる。

この結論からすると、最大限活用された場合、スタジアムは本当の意味で地域の構成要素となるということになる。だが、たとえ年間を通してスタジアムが利用され、チームが大成功し、観客もスカイボックスも常に満員となってコンセッションも大盛況だったとしても、スタジアムは地域の構成要素にはならないと考えられる。なぜならJohnson自身も認めるように(32)、こうした地域の多くは産業衰退からの復興の象徴としてスポーツを位置づけた中小規模のまちであるから、マイナーリーグとはいえプロスポーツの恩恵を活用できるほどの受け皿、資源があるとは考えにくいためである。そして何より、事例地域が暗黙のうちに語ったのは、地域住民やその文脈を全く無視してスタジアムに関する決定がなされることに対する問題提起であった。言い換えるならば、「地域の人々の生活意識」にはなじまない「よそよそしい風景として『白いスタジアム』がそこにある」(松村 2006:15-16)限り、それは地域の構成要素とはならないのである。

3-6 考察

最後に、プロスポーツチームが「地域発展」計画にとってどのような意味をもつのかごく簡単に検討したい。前提として、プロスポーツはビジネスであることを確認しておかなければならない。形態は様々であれ、チームが一企業であることに変わりはなく、特徴的なのはスポーツという業種が比較的話題性の大きい性格を持つというだけである。したがって彼らは利益を優先し、よりよい条件をもつ地域を求める。自治体に支援してもらえれば、当然それも活用する。つまりFort Lauderdaleの事例の言葉を借りれば、チームにとって春季キャンプはトレーニング以外の何ものでもなく、『『ホームチーム』は二の次』なのである(158-159)。

一方の自治体はどこまでそれに応えられるのか。中心街の再活性化や土地取引、都市イメージやアメニティの向上など「地域発展」計画の一部としてスタジアムを建設するつもりが、「時間のプレッシャーの下」(240)にいつのまにか最優先事項となってしまうことは、どこのまちでも起こりうるのではないだろうか。その時、「地域発展」の主体であり受益者であるべき住民の存在は失われてしまうことが多い。

それにもかかわらず、人々はやってきたチームに「熱狂」する。とくに「アメリカ社会では、スポーツの心理的効果に比べると、経済効果は迫力のないものになってしまう」(46)。満員のスタジアム、パブリックビューイングなどに集まって応援する人々や私設応援団、チームが行う地域貢献、マスメディアが語る「地域密着」とはそういったものとしてある。もちろん、それらが住民にもたらす生活の楽しみや夢の重要性を軽視してはいけないうだろう。しかし、プロス

スポーツのもつ求心力や象徴性，それによって集まった集団が具体的地域の「生活の質」に何をもたらすかは，不明確なままである。

4 プロスポーツとコミュニティとの関係

——Inghamの論考に着目して——

Inghamは，プロスポーツとコミュニティに関して，いくつかの論文を残している。最初に書かれたのが，「プロスポーツとコミュニティ：再考と解釈」¹² (Ingham, et al. 1987) である。その後，「スポーツとコミュニティ／コミュニティス」(Ingham & McDonald 2003)，「ウォーターフロント：スポーツーコミュニティ¹³関係をふりかえって」(Smith & Ingham 2003) が提出されている。本節における作業は，Inghamを中心とするかかる議論の進行にあわせてこれらを理解することである。また，その後付加され，深められていったものを確認していくことである。

一連の論文は，プロスポーツと都市（コミュニティ）との関係解明を主題としている。その際，スポーツそのものが社会的空間から抽象的空間への移行すること（ないし，近代化やモダニティの意味するもの）を通じ，プロスポーツとコミュニティとの関係再編に対する理論的かつ歴史的経験的関心が注がれる。Inghamらの分析の特徴は，プロスポーツをめぐる動きを，対応するコミュニティの形成（formation），変化（deformation），再形成（reformation）といった連関のもと，そこに結びつけられる幅広い諸力の連続／非連続的諸契機を見定めていく（Ingham, et al. 1987: 431）点にある。そこから，Victor Turnerのコミュニティス（communitas）を梃子に「市民的儀礼」（civic ritual）¹⁴ 概念を創造，検討し（Ingham & McDonald 2003），プロスポーツーコミュニティ関係が具体的都市再開発場面でいかなる文脈の上に浮上してくるのかを実証的に論じている（Smith & Ingham 2003）。

以下，それぞれの論文について述べていくが，文中のページ数（括弧内数字）は，当該論文中的のページである。また，当該論文に引用された文献等は，特別な場合を除き省略し，邦訳があるものについては，適宜それらを参照・引用した。

4-1 プロスポーツとコミュニティ：再考と解釈

当論文は，プロスポーツとコミュニティ研究に関する長大なレビューである。それはまた，「選択的かつ批判的」（427）なものである。Ingham, et al. (1987) の試みが含意するのは，これまでのスポーツ研究がプロスポーツにおける「資本蓄積の論理」に対する検討を避けてきたことだけでなく，スポーツ研究上の陥穽を批判的に読み取り，訴えることであった¹⁵（大沼 2006: 22）。彼らは，「一つの変化させられた環境と一つの変化させられたプロスポーツの内的経済との関係を綿密に調べてこなかった」（428）こと¹⁶への反省をこのレビューに込めていた。

①社会空間から抽象的空間への移行

まず第一に，プロスポーツが表象的スポーツとして，社会空間から抽象的空間へと移行したことが述べられる。これは，後の議論の前提を形作る。

歴史的にみた場合，アメリカのプロスポーツ，とりわけに膨大な記録を収めているメジャー

リーグでさえ、総合的な19世紀のプロチームのリストを欠いているという(428-429)。というのも、チームや選手の頻繁な結成、消滅、移動があったためである。こうした動きが落ち着きをみせるのが、新リーグ(ナショナル・リーグ)の結成であった(1876年2月2日設立、中心人物はWilliam Hulbert)。これは、「経済の集中化／カルテル化のシナリオ」(430)であるという。このシナリオの特徴は、野球に限らず、フットボールやバスケットボールなどにも共通する¹⁷。

しかし彼らが問題とするのは、こうしたチームや選手の頻繁な移転や移動ではない。むしろ問題なのは、「拡張－縮小－合併シナリオと、影響を受ける都市やコミュニティへの影響が、スポーツ研究者集団の中ではほとんど関心を持たれてこなかった」(431)ことにある。そこには、地域研究とその分析の弱さ、スポーツ史やスポーツ社会学における人類学的観点の欠如、また都市地理学者や都市政策学者達の研究成果に対する十分な目配りの不在が指摘される。そして、「我々はスポーツ研究において地域再生研究アプローチを助力するために、そして同時に、プロスポーツにおける生産者－消費者の変容に適切に接近するために何ができるのであろうか」(431)と問いかける。

ところでIngham, et al. は、プロスポーツ草創期における、プロスポーツとコミュニティの関係を次のように描写する。それは、1919年オハイオ州に設立されたIronton Tanksの事例である。この町は、人口14,007人の製鉄産業の町であった。

「彼らのうちの5～6人がIrontonの女性と結婚し、そこで何年も暮らしたように思う。彼らは、本当にコミュニティの一員になった。もし、あなたがTanksの一員なら、Irontonのすばらしい家庭から夕食やパーティに招かれただろう。Irontonはフットボールの町であったし、町の人々は選手達と一緒にいることを好んでいた。」(433)

こうした、古き良き時代のプロスポーツとコミュニティとの関係は、長くは続かなかった。つまり彼らは、プロスポーツリーグの経済協定の普及によって、チームとコミュニティのつながりが減衰させられてきた、という。そしてプロスポーツという表象的スポーツが、社会的空間から抽象的空間へと移行したことは、まさに生産者－消費者関係への移行であった、と論じる。すなわち、「一般に資本主義にとって、とりわけプロスポーツにとって、ある『埋め込まれた』経済から、かつてそれが埋め込まれていた社会や文化を強力に具体化する、ある自律的経済構造への移行があったと考えられる。その移行は、我々が『抽象的空間におけるスポーツ』と呼ぶものである」(443)、と。

②人為的稀少性と都市間、都市内競争

「抽象的空間におけるスポーツ」を促進する諸条件は、リーグというカルテルによって達成された人為的稀少性と、都市間及び都市内競争の激化によって準備・促進された。これが、Ingham, et al. が掲げる第二の点である。それは、都市の衰退傾向と都市再開発過程の中でプロスポーツフランチャイズの移転／誘致、新スタジアム建設となって顕在化する。

彼らは、Fainstein & Fainsteinの次の言葉を引用し、こうした都市再開発に内在する問題を鋭く指摘している。

「諸都市はその蓄積対象(物)を変えていったのだが、再開発政策の社会空間的ねらいには、注目すべき一貫性があった。すなわち、ビジネスを再建し、そして都市区域の中流階級支配を再建することである。この目標は、一組の連動する努力を通じて実現される。つまり、

白人中流階級を呼び戻すこと、低収入で少数者世帯を中心ビジネス地区から取り除くこと、人種的で階級的な区域隔離を維持・再建すること、周辺的位置に下層階級を封じ込めること、である。」(449)

ここでは、都市再開発にプロスポーツという表象やスタジアム建設が接続されるのであるが、両者の間に位置するものが、熱狂的支持(boosterism)であった。ただ、こうした熱狂的な支持でさえ、「一つの統制された活動」に他ならないとIngham, et al. は考えている。彼らは、Dennis Juddの「第二次世界大戦後の成長が、ビジネスや政府のリーダー達によって注意深く探求されてきたという点を理解することは重要である。アメリカの全ての他都市と同様、『熱狂的支持』は、地方政治の中心の特徴となってきた。成長は、けっして運命のいたずらなどではなかった」という言葉を引用する。そして、「熱狂的支持の表現の媒介物は、制度化されたもの(商業会議所、貿易委員会)と特別委員会(例えば、オレンジ郡ラムズ移転促進委員会)との両方である」(450)と述べる。

Ingham, et al. にとって、熱狂的支持とは、コミュニティ全体の利益と、ビジネスの関心や成長のイデオロギーとを同一視することである。それが今日では、支配的少数者達の物質的利益を増進するだけでなく、象徴的にコンセンサスを再構築することによって、都市問題の政治的解決を図るキャンペーンとして出現する。支配的な人々が、多くの断層線(人種、階級、エスニシティなど)が走る都市において、「コミュニティの創造について、にわかに、そして故意に、喜んで語る」のは、熱狂的支持の戦略を通してなのだ、と彼らは述べる。

けれどもそこに、未だ「実体のないもの」(450)が含まれていることが重要であった。

③市民的儀礼による「コミュニティ全体」の魔術的回復

したがって、最後の論点は、この熱狂的支持をどう理解するかに関わってくる。Ingham, et al. は、これまでの議論を通じて次のように述べる。

「資本蓄積の論理、成長のトリックルダウン・イデオロギー、そして熱狂的支持の戦略は、社会空間の使用価値を超えて、抽象的空間の交換価値を高めてきた。この抽象的交換価値の諸定義と空間の使用価値の諸定義との間には、熱狂的支持と成長のトリックルダウン・イデオロギーが神秘化しようとするところの私的/公的、資本/コミュニティの矛盾の核心があるのかもしれない。そのような矛盾は、逆説的に、文化の中で神秘化され、悪化するのかもしれない。それは、どの程度社会関係を超えた資本蓄積の優位性を、それ自身を社会関係として、つまり文化的モデルの中へと結晶化された階級関係として、認識するか次第である。」(451-452)

Ingham, et al. は、ここで、階級だけでなくモダニティによるコミュニティの変化に着目している。それは大きくいえば、コミュニティの社会化仮説とアノミー化仮説の検討¹⁸ともいえる。彼らは、コミュニティの連続性より、ある断絶性に目をむける。それが、一見前近代的な「有機的コミュニティの変容」という連続的諸過程が、逆説的に、「高度に分節化され、純化された形式において共同体的調和を再形成してきた」(452)と考えるためである。ここには、商品生産の社会化や生産諸関係の合理化が、個人主義、市場に媒介された諸関係を優位にさせ、また文化消費も私事化(privatization)させた、との認識がある。コミュニティはこうした環境のもとにおかれ、追求されるものとして設定されている。したがって、Ingham, et al. は、「抽象的で機能合理的で社会空間の交換志向性を再度指摘することが、物質的でエコロジカルな、

そして倫理的／文化的統合，すなわち『コミュニティ全体』へと導いてきたのではなく，むしろ強制され，そして選択的な下位コミュニティの成長に貢献してきた」（453）と述べる。つまりそれは，社会的統合ではなく，分節化された諸々のコンフリクトに貢献し，資本の投資／引き上げ決定とイデオロギー的営み（コミュニティ全体，成長のトリックルダウン効果）を通じて社会計画者に純化された儀礼を扱うようにさせ，下位コミュニティや文化的の差異の上に表面的な文化的まとまりを増進させるような市民的儀礼を提供するようにさせてきたのではないか，というのである。そして，前節でJohnsonが述べた「要するに，フランチャイズの獲得や保有は，経済的決定以上に政治的なもの」（454）であることを強調する。

しかし他方，それでも「心のゲマインシャフト」としてスポーツが機能するとの主張がある。例えば，Lipskyにとってスポーツとは，人々を一緒にさせるもの，「共同体の連帯のつながりを生み出すと同時に，個人的アイデンティティを賦与する魔法の万能薬（magic elixir）」（455）と観念される。そのためIngham, et al. は，プロスポーツのフランチャイズ，スタジアム建設について，一方における政治的なものと，他方における象徴的なものとの関連を鍵として，儀礼概念を挿入する。というのも，「儀礼の象徴性が共同体的つながり（communal bonding）を誘発する」（Turner）ことや，「象徴それ自体が想像のコミュニティを促進する」（Anthony Cohen）ことがしばしば論じられてきたからである（455）。

Ingham, et al. は，ここでTurnerの「コムニタス」概念に着目する。コムニタスとは，諸個人が物質的にかつ規範的に彼らの生活を規制する構造を超越する特別な経験である。それは，次の三つの形態に区別される。すなわち，（a）自発的で一時的なもの，（b）自発的コムニタスのイデオロギー的解釈，（c）より永続的基盤の上で自発的コムニタスの諸関係を維持する，規範的で，下位文化的試みである（詳細については4-2を参照）。

彼らは，コムニタス概念について，「興味をそそる」（455）としながらも，全面的に依拠しない。代わりに，儀礼一般ではない「市民的儀礼」概念を提案する。「我々は，ある集団や集団性に対して特別で独特な重要性をもったある階級の式典としての儀礼に接近する。つまりコミットメントを生きられた経験の鍵となる領域へと，コミュニティの感覚（あるいはその喪失の感覚）へと，そして社会的まとまり（あるいは葛藤）へと象徴化するある階級の式典」（456）としての儀礼である。

市民的儀礼によって明らかにされるのは，現実には，差異化され，階層化され，個人化された都市でありながら，構造化された分離をイデオロギー的に再度結びつける努力の存在である。またそれは，「公共的象徴性と政治そのものとの接続（articulation）」（456）を内蔵する。市民的儀礼としてのスポーツは，主要な階級の支配的利益と従属集団の利益とを，不平等な相補性の枠組みの内部で結びつけることができる（457）。しかし，この利害関心の結びつきは，文化や意味におけるコンセンサスを前提としない。むしろ市民的儀礼は，「コンセンサスの幻想を構築する」という，ある政治的目的をもつ（458）。よってスポーツは，「適応と抵抗の一つのアリーナ」となり，「一つの象徴的戦場」となる，というのである（457）。

④要約

Ingham, et al. は，全体を通じて，以下のようなまとめを行っている。

市民的儀礼としてのスポーツは，一連の流行の中に「コミュニティ」という用語を流通させる。スポーツの生産は，暖かく説得力ある言葉としての「コミュニティ」にますます頼るよう

になってきている。しかし、それが、政治－経済的諸関係に埋め込まれていることを忘れてはならない。問題は、どのようにコミュニティ全体の中で、分節化されたものと純化されたものとが再結合し、そしてそのような中でいかにして「財政上の健全性 (fiscal welfare)」がはかれると主張することができるのか、という点にある (460)。

彼らは、プロスポーツイベントが確かに、「想像のコミュニティ」全体に貢献することができるだろうという。確かにこの「表象のコラージュ」(460) (プロスポーツやイベント) が、想像のコミュニティ全体の構築に助力するものであれば、それらは遂行されなければならない。しかしこれが、アメリカにおけるスポーツ－コミュニティ関係の「やっかいな問題 (crux)」(461) なのだ、という。というのも、そこにはかつて存在したプロスポーツチームとコミュニティとの互恵的關係が、逆に今日、脅しとなって現象しているからである。プロスポーツは、埋め込まれた経済から抽象的経済へと進み、スポーツは資本の論理へと隷属してしまっている。以前の互恵的諸関係は、スポーツ・カルテルの経済的計算によって、資本の引き上げ／再投資決定といった幅広い諸力によってますます左右されるようになってきている。つまりフランチャイズの移転は、資本蓄積の抽象的で機能的で合理的な論理と、共同消費の社会的使用価値との間の矛盾を劇的に露呈してしまう。加えて人為的稀少性は、ごくわずかの都市だけにプロスポーツを都市の儀礼として持つことを許可し、プロスポーツという乗り物を媒介とする象徴的なコンセンサスの構築を可能にさせている (461)。ここにあるのは、プロスポーツ－コミュニティの問題が都市再開発の必要の先か後かといった問題ではなく、「一つの共同決定 (a profess of codetermination)」の問題である、と彼らは結論づける。

4-2 スポーツとコミュニティ／コミュニタス

前節で取り上げた論文から16年後、Ingham & McDonald (2003) は、スポーツのもつ表象性とコミュニティとのつながりにフォーカスをあてた。その出発点を、Emile Durkheimの集合表象 (representation collective) に置き、「組織的競技スポーツ (アマチュアやプロ)」に言及する。それは、「我々らしさを体現する人、自らの集団がそれに影響を及ぼす対象との関連の中でそれ自身を想像する方法、そして社会的連帯の資源と呼ぶものとして」(17) である。つまり、ここでは個人表象の総和には還元できない、またそれらとは区別された集合表象としての、スポーツやコミュニティ、また両者の関連が考察の対象として措定される。両者の関連とは次のようなものである。

「我々が同一視するある対象と同様、ある競技者やあるスポーツチームは、その対象にカセクシス的に関連し、所有の仕方に関して (我々の競技者、我々のチーム)、そして彼らの自己定義のなかへ『表象』を投入する (私は〇〇のファン；私はマイク [ジョーダン] のようになりたい) 人々に対して、ある『コミュニティ』を定義する。」(17)

ところで、今日のプロスポーツ状況をみた場合、それが、必ずしも地理的空間の共有を必要としていないことが重要である。すなわち、「今日のメディア飽和状態、ヴァーチャル社会においては、表象的スポーツ『諸コミュニティ』のメンバーは、必ずしもある共有された地理的空間に存在する必要がない。ファンは、象徴的な『諸コミュニティ』を遠くの関連空間の中にも作ることができる」(17) ためである。Ingham & McDonaldは、アトランタの熱狂的ファンは、アトランタに住んでいなくともチームと一体化できると述べるが、これは、何もアメリカに限ったことではない。例えば、三位一体を掲げる日本のJリーグは、「地域密着」

を唱えるが、その実態についての証拠が熟しているわけではない。「表象的スポーツが、大衆の中に礎を降ろした『コミュニティ』それぞれの形態を作り出すと同時に、階級横断的提携が、応援やすべてのファンという意味で集合表象のまわりに形成される。しかし、この応援がどのように組織され、執り行われ、そして理解されるのかという点は必ずしも明らかになっていない」(18)のである。

以上を前提とし、Ingham & McDonaldは、コミュニティやコミュニタス、そして両者とスポーツとの関係を理論的に究明していった。

①コミュニティについて

コミュニティについてIngham & McDonaldは、Ferdinand Tonniesの古典的分類、ゲマインシャフトとゲゼルシャフトから議論を開始する。彼らは、これらの概念が、近代世界での産業秩序の拡大によって引き起こされるコミュニティの変容を説明するだけでなく、そこに「過去を社会組織の現存形態の批判とみるノスタルジアの政治」(19)を見て取る。すなわち、我々はコミュニティを「善い社会 (good society)」の象徴として利用する一方で、このこと自体が「激しさを伴う暴力や継続的対面的な社会関係、それが大衆の文化的生産を伴うこと」(19)を忘却の彼方に追いやってしまう、という。

ここに投げられるのが、モダニティである。Ingham & McDonaldは、Max Weberが述べる徹底した社会生活の合理化に対する悲観的見通しについて述べ、George Herbert Meadの「重要な他者の集まり」を検討し「第一次集団 (primary group)」への影響を論じたCharles Horton Cooleyに言及する。しかし彼らにあっても、モダニティのインパクトを単に人間関係の欠乏と見なす点では高度に図式化されたあり方ではなかったか、とその歴史的限界を指摘した。彼らは、Louis Wirthの「よそ者嫌い (xenophobia)」の概念が、異質性に対する嫌悪感が強制的同質性へと転化することに着目し、Richard Sennettの「成熟した資本主義の全体的傾向は、前近代的な有機的コミュニティを変えていったかもしれないが、逆説的に、それらは高度に分節化され純化された形式において、……(中略)……、共同性を再形成していったのかもしれない」という見解を取り上げる(19-20)。そして、主要な論点として、コミュニティの包摂／排除を掲げた¹⁹⁾。

歴史的にみて、スポーツそれ自体が階級によって基礎づけられた排他的実践であったことはいうまでもない。とりわけアメリカ・スポーツ史を紐解いてみても、黒人(例えば、ニグロ・リーグ)やエスニック・マイノリティは、一つの主要な論点であった。今日においても「エリート的競技スポーツの中でのアフリカ系アメリカ人の存在、また今日のメジャーリーグにおけるラテン系出身者の増大にもかかわらず、構造的な人種差別主義は、有色の人々のコミュニティを白人からスポーツのウチとソトの両方において隔離し続けている」(21)という。ジェンダーもまた同様である。「過去20年以上にわたって、フェミニスト研究者達は、男性の喜びが女性の仕事という認識を示してきただけでなく、スポーツが、社会的諸関係の生産と消費の側面と市民的儀礼に参加する意味との両方で徹底的なジェンダーの再構築を必要とする唯一の社会制度であるとの認識を示してきた」(22)。たとえ、女子のプロチーム(例えば女子プロバスケットボール)が創設されたとしても、「表象的スポーツは、広くその筋肉主義的歴史によって過度に決定されて」(22)おり、Bruce Kiddがいうように、トロント・スカイ・ドームはあくまで「男性の文化センター」(22)なのであった。つまり、表面上は均質にみえていても、表象的ス

スポーツの「諸コミュニティ」の内部が階層化されていることは明らかであった。単にコミュニティとはいえ、下位コミュニティの出現により、コミュニティ一般は、こうした種差をもつことになる。

ところで、1970年代以降、アメリカでは内的に階層化され、階級に基礎をおいた諸コミュニティは、生産関係よりも消費関係を重視するようになっていく。なかでも都市の変化は大きく、脱産業化のもと、失業者や低賃金パート労働者が多く輩出され、とくに女性世帯主、マイノリティ、子どもといった都市貧困層が生み出されていった。そして1980年代から1990年代にかけて、経済的な都市「諸コミュニティ」の活性化が試みられていく。その特徴は、「(ポスト)フォードイズムのアメリカの都市の中で、資本を持つ人々は、イベント、スペクタクル、歴史とフェスティバルの消費を推奨することによって、新鮮な消費者『諸コミュニティ』を創出しよう後押ししてきた」(23) ことにある。

こうした中、表象的スポーツは、合理的で抽象的消費の「コミュニティ」を構成するものの一つであり、ライフスタイルの実践の一つであり、誰でも選択可能な楽しみの一つとなる。それは消費という点で、もはやエリートの特権でもなく、全ての階層と社会集団の中で追求されるものとなっていく。

しかしながら、コミュニティの包摂／排除に関しては、「境界の監視と境界への感受性は、地位によって差異化されたライフスタイルの飛び地の中で明らかにされながら、内的純化を促進する方法で境界の防御へと導く。また、この差異化と地位に基づく文化的力は、地位と集団的消費のアメニティの配給における州や郡の諸政策によって強化される」(23) という。つまり、都市再生のために建設されたスタジアムに「近接した場所に暮らす人々は入場料を負担することができない。皮肉なことに、そのようなスタジアムを建設するための逆進的課税の場合には(例えば、売上税の利用)、さらにこうした施設に対する支払いと不釣り合いな重荷を貧困者に負わせることになる。その上、減税や企業投資を誘発する非課税区域と同等のものの創出は、貧困者にとって必要不可欠なサービス、つまり教育、都市再生、上下水道計画や公共安全に対する財源不足を生み出す」(23) ののである。都市再生におけるスタジアム建設は、貧困層と非対称であり、その差異はより悪化させられるのであった。

②コミュニティについて

さて、以上のような都市における非対称性とは別に、今日のプロスポーツが地域に結びつけられる時、しばしば「地域密着」「地域に根ざした」「地域一体となって」という言葉が付随することになる。前述したように、Ingham & McDonaldはそこに、Turnerのコミュニティをみる。ここでは彼らが詳しく論じなかった部分も含めて、コミュニティについて立ち入ってみたい。

Turner がいうコミュニティは、ポール・グットマンの用語に由来するという(ターナー 1981:170)。それは、いわゆる地理的範囲を有し、特定の行為のパターン(共同性)やそれを維持するために必要な地位役割構造を内包した「コミュニティ」とは区別される。Tonniesによりながら、Turnerは「友情とは、血縁でも地縁でもない『感情の共同体』という一種のゲマインシャフト」(同上書 171)と規定する。つまり、ゲマインシャフトを構造とコミュニティの複合、つまり「構造的なもの」と「社会的なもの」とに区別する(ターナー 1976:181-182)。構造的なものを超えた関係の一様式(同上書 182)、「構造的な性格がなくなり、同年で

平等な個性にあふれた人間とのあいだに自然に発生する関係が、コミュニティなのである」(ターナー 1981: 171)。ここにいう構造は、Lévi-Straussのいうある実在する社会構造を超えた「無意識的範疇」ではなく(同上書 170)、Robert Mertonが名づけたものに近い。それは「一定の形に配列された地位と役割のセット、ならびに地位の連鎖」(同上書 171)と解される。他方、コミュニティは、Durkheimのいう“機械的連帯”の概念、つまり「内集団と外集団」の対立・対比に基づいて決定される統合性と原則的に区別されるべきもの(同上書 171-172)である。コミュニティは、具体的、歴史的、個性的な諸個人間の関係であり、これら個人は役割や身分に分節化されることなく、相互に対面しているという直接的(自然発生的)で無媒介で全人格的な対面である。また、同質的で構造化されないものでもある(ターナー 1976: 182)。また、「継ぎ目なしで無構造の一つの全体」(同上書 188)といった属性を備え、それはユートピア的平等主義的關係を具備している。しかしこれらは持続されることがなく、やがて構造へと発展する。諸個人間の自由な諸関係は、社会的人格の間における規範=支配関係に変化してしまうのである(同上書 182)。よって、コミュニティを理解するには次の三つを識別する必要がでてくる(同上書 182-183)。

(a) 実存的あるいは自然発生的コミュニティ (existential or spontaneous communitas)

一時的に発生し、ヒッピーたちが“ハプニング”と呼ぶものにほぼ近い。

(b) 規範的コミュニティ (normative communitas)

そこでは、時間の影響、資源を動員し組織する必要性、共通目標追求の集団構成員を社会的に統御する必要などのために、実存的コミュニティが持続的な社会的体系に組織される。

(c) イデオロギー的コミュニティ (ideological communitas)

これは、実存的コミュニティに基礎づけられたさまざまなユートピアの様式の社会に貼られるラベルである。またそれは、実存的コミュニティという内的経験が外側に現れる諸効果(外部形式)を記述する試みであり、この種の経験が盛んになり倍加することが期待される最適の社会的諸条件をひとつひとつ読みとる試みでもある。

構造とコミュニティの関係でいえば、規範的コミュニティもイデオロギー的コミュニティもともに、構造の領域内に含まれ、そして「構造や法律への“後退であり失墜”と多くの人たちがみるものを経験することが、歴史上にあらわれたすべての自然発生的コミュニティの運命」(同上書 183)となる。それは、「『自由』なコミュニティから、制限された構造によって与えられる団結へと変わってきた」(ターナー 1981: 172)。自然発生的コミュニティは、構造の形式では決して適切に表現され得ず、「あるとき突然、ないし、いずれの集団構成にも属していない人間の間」や「社会的地位や身分に就く間の空白期間、“社会構造の裂け目”として知られていたところに、よく発生するものと期待さ」(ターナー 1976: 190-191)れた。また、「“構造”に組み込まれた生活は、客観世界の困難事に満ちている。いろいろな決定をしなければならぬ。……(中略)……自然発生的コミュニティには、なにか“魔術的”なものがある。主観的には、そこには無限の力の感情がある。だが、この力には、そのままでは、社会生活の組織化された細部には、すぐには適用されえない。……(中略)……。他方、構造的な活動は、それに関わる人たちが定期的にコミュニティという再生力の深淵に沈潜することなしには、たちまち、無味乾燥となり機械的になってしまう。英知とは、時と場所の特定の状況のもとで、構造とコミュニティの適切な関係をつねに見出し、いずれかの様式が最高の時にそれを受け入れ、他の様式も棄てることをせず、そして、その一方の力が現在使われているときにもそれに執着しない

ことである」(同上書 193)ともいう。加えて、「自然発生的コミュニティは、構造との対話において、女と男と結婚するように、構造との結びつきにおいて、自然」なのであり、「一方は力を豊かに供給し、他方は沖積した豊穡さをつくる」(同上書 194)のだと述べる。

もちろん、Turnerは、Ingham & McDonaldが先にあげた現実の問題を全く無視しているわけではない。例えば、イデオロギー的コミュニティと自然発生的コミュニティに言及する中で、「われわれが規範的コミュニティとよぶ平等主義の様式が、当該文化に、とくに境界的状況リミナリティや構造における劣位性に存在することを知らず手がかりや指標となるものがある」(同上書 184-185)としている。また、「われわれは、完全な平等がひとつの社会的次元で想定されるときはつねに、別な次元で完全な不平等を惹き起こすという直感を、検出する」(同上書 188)ともいう。

ここでTurnerは、コミュニティの役割について次のように述べる(ターナー 1981:171)。
 「そして二人〔リミナリティとコミュニティ〕は手を携えて反構造とよべるものを形づくるのだ。ところでコミュニティとは、構造のもつ符号を逆転させてプラスとマイナスとが入れ替わったものではない。むしろそれはあらゆる構造の源泉であり起源であると同時に、構造に対する批判者の役を果たす。なぜならコミュニティの存在によって、あらゆる社会構造上の法則が疑わしいものとなり、新たな可能性が示されるからである。すなわちコミュニティは普遍性と解放性を指向するのである。」(〔 〕内筆者)

Ingham & McDonald自身、このイデオロギー的コミュニティがモダニティによる浸食を受けながらも、再創造されていくことに注目する。すなわち、コミュニティのイデオロギー的作用が、今日メディアを通じてさらに増幅され、社会構造の問題を「カモフラージュ(不平等の中での不透明さ)」(26)することを問題に据えるのである。確かに、Turnerが述べるように、結婚と同様、構造と自然発生的コミュニティは「自然」なことかもしれない。また、「ごく最近、アメリカや西ヨーロッパで、自然発生的コミュニティを、あえて言うならば、呪文で招来させるような儀礼的諸条件を、再創造するいくつかの試みがなされている」(ターナー 1976:191)というように、プロスポーツやスタジアムへの人々の感情は、「力を豊かに供給」するものかもしれない。さらにそれは、コミュニティを「再創造するいくつかの試み」の一つなのかもしれない。しかし、彼らがみるのは、ここに明らかに現実との非対称性があることであり、もしそうであったとしても都市や地域の社会構造は、周辺化された地域や貧困層を内包しており、「沖積した豊穡さ」よりは、干上がった砂漠に近い。Turnerが引用するゴンザーロの共和国(コミュニティ)は、「自然の信じられない豊穡さ」(同上書 188)によって担保されるものであった。Ingham & McDonaldがいうのは、もはや「自然の信じられない豊穡さ」など存在せず、むしろ差異化され、分節化された都市社会の上を行き交う、「(構造的かつ文化的に)変化した一連の諸状況のもとで、コミュニティを助長し、再生させるおびただしい数のイデオロギー的努力」(27)の方である。これを焦点化し、概念化したものが市民的儀礼であった。それは、フォーディズム的政治的エコノミーの進展による国家と市民社会の相互浸透の結果、公的/民間セクターの区別が曖昧となり、とくに儀礼の生産という点で、これら一連の諸変化を捕捉する概念として構想された(27)のであった。

③スポーツとコミュニティの構築

Ingham, et al. (1987)が明らかにしたことは、「表象的スポーツが歴史的に社会的経済空間

から抽象的な経済空間へと移動したことであり、それ故、スポーツがローカル『コミュニティ』をエンパワーメントする力を作り出す道具となることが困難になること」(27)であった。よって、ここに批判的問いが投げられる。すなわち、「表象的スポーツが『コミュニティ』を創造するための効果的乗り物であるのかどうか、あるいは、それが単に自然発生的コミュニティを生み出すためだけに奉仕するものであるのか」(28)、と。

その答えは、「自然発生的コミュニティは、つかの間のことであり、コミュニティそれ自体に対する基礎を形作ることができない。コミュニティは、時間と社会的コミットメント、社会関係資本 (social capital) の投資を含む。コミュニティは、ユートピア的意味において、信頼と義務を含み、そして表象的スポーツは、とくに北米において、そのようなものに対する基礎をなんら提供しない」(28) ことであった。

また、表象的スポーツが社会的経済空間から抽象的経済空間へと移行したもう一つの帰結が、「使用価値を超えた剰余価値の上昇」(28)であったという。Ingham & McDonaldは次のように述べる。

「この抽象的剰余と交換価値の定義と、スポーツとスポーツ空間の社会的使用価値の定義との対比は、私的／公的、都市の加熱についての市民的イデオロギー（「我々はメジャーリーグ都市なんだ、だからここに投資せよ！」）、トリックルダウン効果（スポーツのフランチャイズは仕事を生み出す。しかし、我々が記したように、それは健康保険や年金のない低賃金、パートタイム労働）、そしてコミュニティ全体という魔法の創造が神秘化する資本／コミュニティの矛盾の中心にあるかもしれない。」(28)

加えて、彼らは、「あらゆる魔法の『コミュニティ』がしばらくするとフィクションであることが明らかになろう」(29)と述べ、コミュニティとコミュニティとの関係を再度つきつめていく。

Turnerがいうのは、構造とコミュニティの適切な関係をつねに見出すことであり、いずれかの様式が最高の時にそれを受け入れることであり、他の様式も棄てることをせず、そして、その一方の力が現在使われているときにもそれに執着しないことであった。しかし、Turnerが人類学的に検討してきた社会（伝統的な前近代社会）は、地理学的コミュニティなしにコミュニティを述べることができない社会であった。他方、Ingham & McDonaldが述べる表象的スポーツは、もはや地理学的コミュニティを前提としない。にもかかわらず、市民的儀礼としてパレードや祝賀が今日組織され、コミュニティは市民的儀礼によって引き受けられている。よってIngham & McDonaldは、「けれども、周辺のなものや境界のものは完全にそこに含まれているのだろうか」と問い、そして自問したのであった。「そのような社会的に階層化され、差異化された状況のもと、とりわけ、うまく組み合わせられた市民的儀礼が、決まり切った、あるいは『社会的に死んでしまった』空間、つまり芝生とコンクリートのトンネルの中で行われる時に、我々はなぜ、コミュニティでの試みがゆがんでしまうことに突然気づいてしまうのだろうか」(30)、と。その答えは、「特別な者の表象として、市民的儀礼は、日常生活からはなはだしく隔たり、そして後者〔市民的儀礼の形で支配的な人々による支配的な人々のためにうまく組み合わせられた構造化されたコミュニティ〕の諸矛盾すべてを表す」(〔 〕内筆者)(30)からに他ならなかった。

4-3 ウォーターフロント：スポーツーコミュニティ関係をふりかえって

同論文の目的は、「ローカル・コミュニティ内にプロスポーツフランチャイズを位置づけ、そしてローカル・エリート達が彼らのフランチャイズのためにコミュニティの支援（情動的・財政的）を呼び起こそうと試みる際の、方法を分析する」（252）ことにある。ここにいう方法の分析対象は、具体的にはスタジアム建設と都市再開発をめぐる政治的エコノミーである。前述した二つの論文とほぼ一貫した内容となるが、とくに、Wirthから近年のZygmunt Bauman, Robert N. Bellah, et al.²⁰, Robert Putnamといった研究者達の理論的パースペクティヴとスポーツーコミュニティ関係を関連づける点が特徴である。ここではオハイオ州ハミルトン郡（Hamilton County, Ohio）における住民を対象としたパネル調査の事例報告を通して、政治的エコノミーとコミュニティとの関係が探究される。結論を先取りすれば、「プロスポーツは、永続するコミュニティの感覚を再構築するための有効な手段ではない」（252）というものであった。

さて、プロスポーツは、アメリカ諸都市の再開発／成長戦略における「経済的なエンジン」として利用されてきた。その際、政治的リーダー達によって唱えられるのは、経済的利益が「約束」されることであり、コミュニティの感覚が呼び起こされることであった。ただ、経済的約束についての研究が、批判的見解を示していたことはすでに述べたとおりである。となると、後者のコミュニティやその感覚、コミュニティを一体化させるという点が残された課題となる。かつてピッツバーグの事例において佐藤が述べた「苦悶の元」（佐藤 1998）がそこにある。Smith & Inghamは、「プロスポーツ競技会場建設費用があるのに、そのような建設がコミュニティ全体の感覚に貢献したり、それが郊外のコミュニティの間やその範囲内で都市空間と同じ分裂を生み出すのか」（253）という問いを發し、もし、プロスポーツがこうしたコミュニティ全体の感覚に貢献しないのなら、「限られた経済的利益を認識し、都市再開発と経済的再配分のための新たなオルタナティブが追求されるべき」（253）と主張する。ここで示されるのは、「なぜ人々のコミュニティ感覚への訴えが強いかを説明し、このコミュニティの感覚、都市再開発の必要とプロスポーツフランチャイズ間の交差を説明する、コミュニティについてのいくつかの理論的パースペクティヴ」（253）である。

①モダニティとコミュニティについての社会学的パースペクティヴ

まずSmith & Inghamは、「コミュニティ」概念の再検討を行う。プロスポーツによって惹起される他の人々との親密さや仲間意識といった感情の再生が「コミュニティ」概念に付着することになるが、その吟味がここで行われる。すなわち、それは「想像の共同体」（Anderson）、「失われた楽園」（Bauman）、「記憶の共同体」「希望の共同体」（Bellah, et al.）といった言葉で表されるところの、ノスタルジアを伴った願望の共同体である。彼らが、Baumanを引きながら喚起するのは、「我々が用いる想像された『コミュニティ』は、一つの失われた楽園、あるいは厳密にはそれが想像されたものであるが故に、未だ希望された楽園」（254）という点である。

ここでSmith & Inghamは、コミュニティにおけるスポーツの有り様を、次の言葉から引き出している。

「こうしながらも私の胸の内には、こんな考えもありましてね。サフォークの町の雰囲気は、昔の感じを取り戻してくれたらと思うのです。昔は顔が15揃えば、もう野球チームの出

来上がりです。公園に行って、ユニフォームも何もなしで野球を始める。ただそれだけで楽しかったものです。ところが近ごろときたら、野球をするにしたって、やれユニフォームだ、やれリーグだ、やれ規則だ何だということになる。お互いの間に信頼がない。昔は違いましたよ。今私たちに必要なのは、そういった昔風の精神だと思うのです。」(ペラー他 1991: 13)

Bellah, et al. によって例示されたジョー・ゴーマンにとって、彼の成功は「地域共同体が一部分的に彼の努力を通じて一作り上げることができた連帯感トウゲザネスの体験」(同上書 11)なのであった。しかし、その前提にはモダニティによって変容するコミュニティの姿がある。よって、Smith & Inghamが関心を寄せるのは、「我々はどうのように『コミュニティ』が未だ後期資本主義の社会関係のおびただしい変化の中でも想像されることができるのか」(254)ということになる。

彼らはWirthやSennettを引用しながら、都市生活における社会的接触の多さの重要性を指摘し、「都市住民は農村住民よりもより多くの人々を知るかもしれない。しかし彼らは、同時に、農村がおかれた状況にみられる親密な関係といった多くの質を欠いているかもしれない」(255)と述べる。そして「セネットのキーワードは場所である。上記に記述された状況もとて、場所は増大する価値を帯びる。場所の感覚は、何か抽象的なもの(空間)ではなく、特殊などかに属する必要に基づく。そしてこの必要を満足させるとき、人々はコミットメントと義務を経験することができる。つまり経験は特別などかに属し、その安全を守ることに属する」という。けれども、今日のコミュニティは、しばしば「孤立、分離、壁によって保護され、防護された門の代役を務め」(Bauman 2001:114)てしまう。「『現実のコミュニティ』は、都市再開発のイデオロギーによって調達され、想像された『全体としてのコミュニティ』と対照的」(255)なのである。そしてSmith & Inghamは、「(離れてしまうかもしれないチームをもつ都市では)『伝統を保護する』、また、(メジャースポーツのフランチャイズがない都市では)『メジャーリーグ都市になる』という共同的な推進力において、多様な有権者を統一するイデオロギイ的試みは、アメリカ人の意識の中でスポーツが卓越した位置にあることと、我々のコミユナな構造が修繕を必要としているという信念から燃料を得ている」(255)と述べた。

しかし、「全体としてのコミュニティ」は決して一様ではない。Bellah, et al. がいう記憶の共同体や希望の共同体が、実際にひとまとまりのものとして差し出されてはいないのである。Smith & Inghamは、古い都市住民が前者と結びつく時(メジャーリーグチームがあり、かつて両親と見に出かけたなど)、これらはネットワークの社会関係資本が市民の誇りという象徴資本に結びつけられる。より新しい都市住民は、成長する活気ある都市という希望の共同体に結びつけられる。そして、これらが象徴的資本と結びつく中で、プロスポーツへの公的補助も誘導されるのだ、とする(256)。

さらに検討を加えるなら、こうしたコミュニティですら、すでに脆弱なものになってきていることも確認させている。Putnamが記すように、より大きな社会的ネットワークへのコミットメントはすでに後退してきており、「三次集団(tertiary associations)」²¹が急速に広がってきている。そこで描かれるのは、社会的関与やつなごりを最小限にしようと努めるエリート達の姿であり、おずおずと「ライフスタイルの飛び地」へと引きこもる人々の姿である。ここで、場所は著しく両義的な存在となる。

②プロスポーツ、政治的エコノミーとシンシナティ

第二次世界大戦以降、アメリカの諸都市は、白人中流階級の郊外への脱出（white flight）、脱工業化、税収基盤の下落、そして公共サービスへの要求の増大といった課題に直面した。そのため、政治的リーダー達は、こうした市民ニーズに応えるため、経済成長に関する戦略を追求してきた（256-257）。Smith & Inghamは、こうした成長モデルのもと、「新産業形成を刺激する社会空間的都市環境」を提供するための多様な活動が取り込まれてきたこと、そしてプロスポーツフランチャイズが、その「成長マシン（growth machines）」となってきたことを述べる。その特徴は、公的セクターと私的セクターとの相互浸透であり、新スタジアムの建設が、概ねこうした「成功の連立（growth coalitions）」のもとで達成されてきたことである。ここでは経済的リーダーと政治的リーダーが「熱狂」的キャンペーンの中で一体化し、都市再開発についての政治的解決が正統化されていく。スタジアム建設に対する公的補助金の投下は、支出するコミュニティに対してはごくわずかの利益しかもたらさないことが述べられてはいても、「コミュニティへの経済的機会費用（ちようど、学校の供給、道路や公共交通機関の刷新の無視）が莫大であるにもかかわらず、公的資金は百万長者のオーナー達や彼らの事業に、彼らの利益を後押しする中で、支出されてきている」（258）という。

③プロスポーツとコミュニティとのつながり

スタジアム建設のような公共的かつ民間の事業に対するセールスポイントは、コミュニティ・アイデンティティの確立や維持となる（258）。しかし、Smith & Inghamは、都市とチームの絆は薄いと考える。というのも、チームのフランチャイズ移転は、ホームタウンの人々の期待を裏切ってきたからだという。それでもプロスポーツチームと都市の結びつきが強調されるのは、様々な有権者を獲得するため、経済的資本と市民的誇りという象徴資本とが結びつけられるからである。しかし、コミュニティのためとはいえ、過去の「コミュニティ」は既に変化しており、一連の社会関係も変わってきている。また「コミュニティの感覚」もかつてのものではなくなっている。加えてこうしたスタジアム建設をめぐる利益の再配分は、「ロビンフッドの原理に反する」ものになっている。スポーツという市民的儀礼が、経済的貧困者（人種に拘わらず）を排除して以降、差異の政治はますます悪化していると述べる（258）。

そのため公的セクターにおけるジレンマは、「どんな方法で莫大な税金を受け取るにふさわしいものとしてプロスポーツを売ることか」となる。その糸口が、前項で述べられたコミュニティスの概念である。コミュニティスは、「スポーツフランチャイズを維持／誘致、論議する文脈の中で、コミュニティの感覚を再構築する」際の概念として（たとえ自覚されてはいなくとも）中心的なものとなってきた（259）。市民的儀礼は、政治的経済的従属集団や下位コミュニティに所属する人々を互いに結びつけようとする支配的関心における、州と私的資本双方の資源の複合であった。

Smith & Inghamは、それでもなお、コミュニティスが強力的に作動するのかと問いかける。つまり、なぜ学校教育等別の問題があるのに、公的資金を投じたスタジアム建設を納税者に納得させることができるのか、と。彼らが用意する答えは、まさにコミュニティに内在する。すなわち、人々の心理的孤立感、所属の感覚や市民参加の感覚を渴望させもするからである。

近代都市における物理的な近さと社会的距離は、我々がノスタルジックにかつて存在したと信じている「コミュニティ」の感覚を再び発見すると、人々がお互いに結びつく方法を探し出

そうとする根拠となる。「成長についての支配的立場」は、プロスポーツチームへの補助金を通じて、人々に成長の経済的利益を納得させる。政治的、経済的リーダー達は、大衆に対して、「我々のチーム」という結節点の周りにちりぢりになった我々のコミュニティをまとめあげ、プロスポーツのフランチャイズがまたコミュニティの感覚を供給することができる、と約束するのである(259)。

Smith & Inghamは、すべての人種、階級、宗教をスポーツ試合に集まる群衆の中に見いだすことができるとしても、それは果たしてコミュニティなのだろうかと問いかける。すでに彼らは、「表象的スポーツは『コミュニティ』を作ることができず、ただ自発的な(そして一時的な)コミュニティを作るだけ」(260)と論じていた。そして本論で更に深められるのが、コミットメントの問題である。

もし、コミュニティが形成されるなら、彼らの時間やコミットメント、社会関係資本をおく場所があるはずである。それは、Putnamが「三次集団」と述べ、Bellah, et al. がいう、土地に縛られたあらゆる絆がほどかれてしまった中で「ライフスタイルの飛び地へ後退」するところのものである。Smith & Inghamは、そうした都市の環境のもとでは、自発的コミュニティすら創造することが困難であるとする。さらには、これらから主要な利益を受ける人にとっても、本当にコミュニティを必要としているのかと問いかける。実際彼らは、「コミュニティの中にいることやコミュニティと共にあることは、必然的にめんどろな親交をとまなう。そのため、新しいエリート達は地域性によって定義されることはない。つまり彼らは真に国の領土の外にあり(Bauman 2001: 54), だからグローバル」(260)なのではなかったのか、と。そして、「ただ単に再配分の政策が、裕福な者達とその他の人々との格差の増大によって悪化してきただけでなく、コミュニティへのコミットメントの格差が、都市エリート達の領土外主義によって強化されてきた」(260)ことを強調する。さらに、「企業アメリカやとメジャーリーグスポーツは、『コミュニティ全体』を確立することもできなければ、しそうにもない。なぜなら、そのような確認は、忠誠心や親密性、つまりコミットメントの足かせを必要とする」(261)からだと主張する。

④シンシナティの事例分析から

シンシナティに投じられたSmith & Inghamの問いは、以下のようなものであった。

「スポーツは、かつて存在したと信じられている想像されたコミュニティの感覚を生成することができるのか。その象徴的資本は本当に、場所の社会関係資本を、場所は空間であるというイデオロギー的表象を通じて、空間の『想像された』社会関係資本の中にとけ込ませることができるのか。これは本当に重大な問いである。大都市に暮らす人々は、スポーツチームへの公的補助金についてどのように感じているのか。経済的な意味で主要な関心、そしてスポーツフランチャイズの中にある経済的資本と象徴的資本の融合を通して媒介される関心は、どのようにして経済的資本を持っていない人々からの同意を得るのだろうか」(261)。

シンシナティには、NBLのレッズ(Cincinnati Reds)とNFLのベンガルズ(Cincinnati Bengals)が本拠地を構えている。シンシナティのスポーツ関連都市開発は、1948年の「メトロポリタン・マスター・プラン」以来、ウォーターフロントでのレクリエーション開発事業として始められた。これにより、リバーフロント・スタジアム(レッズとベンガルズの共用スタジアム)、リ

バーフロント・コロシウムを含む複合居住施設開発がなされ、資金調達のために1962年に債券が発行された。これらは、リバーフロント東地区の開発としてなされた。しかし1990年代の初頭、「シンシナティ将来構想特別委員会 (Cincinnati Vision Task Force)」は、倉庫群が残り手つかずのままであったリバーフロント西地区の開発構想（中心は、レッズとベンガルズ、それぞれの新専用スタジアムを含むレクリエーション施設建設）を打ち上げた。そして、シンシナティを含むハミルトン郡住民に対しては、売上税1%の上乗せが提案されることになる(261)。その間、レッズやベンガルズのフランチャイズ移転話が新スタジアム建設を後押ししたこと、メジャーリーグ都市の地位を失うかもしれないことから、熱烈な促進キャンペーン (boosterism campaigns) が繰り広げられたことはいうまでもない。結果的に、0.5%の売上税の増税により、スタジアムだけでなくリバーフロント西地区周辺を含めた開発がなされていった (262)。

Smith & Inghamは、「ボトムアップ」的に住民の面接調査を実施し、こうした自体が実際どのように住民に写っているのかを確認する。というのも、「そのプロジェクトに対するほとんどの支持が『トップダウン』的になされてきている (例えば政治的あるいは経済的権力からなされてくる)」からである。こうした事態を「中和する (counteract) 手段として」、この調査研究が企画された。それは、「声高にあるいは突出して叫ばれた者ではない側の人々のパースペクティブの分析」により、「正当化される」ものであった (263)。

実際のパネル調査の対象は、34名 (男性10名、女性24名、年齢23才~84才) であった。そこでは5~10人のフォーカス・グループが組織され、予備調査を経て本調査が実施された²²。調査によって得られた結果は、およそ次のようなものである。

コミュニティについての感覚は、「全体 (空間) としての都市よりも、彼らの周りの近隣 (という場所) により密接に結びついていた」(265)。確かに、全体的な「シンシナティ・コミュニティ」という感覚はあるのだが、それは、近隣に次ぐものであった。ただし、スタジアムへの公的資金導入について語り始めると、シンシナティ全体のレベルでは、統一よりも分離の感覚が述べられたという。その顕著な分離・対立とは、「郊外対都市近隣、下層階級対上層階級、そしてスポーツファンとファンでない人々」(266)との間にある。Smith & Inghamは、スポーツファンとファンでない人々に関するケイシー (Kathy) の言葉を引用している。

「フットボールがなくなるとおそれてスタジアムに賛成するのは、たぶん自分達の生活に
関したことに一度も投票したこともない、これらサポーター達 (jocks) なのよ。」(266)

都市再開発の必要性については、都市中心部だけでなく、周辺部分 (高齢化が進んでいる地区) についても述べられた (266-267)。また、学校の問題もそれに次ぐものとされた (267)。学校の改善が高い優先順を持つはずなのに、それがいつも後回しにされてしまう事への不満である。そして中心部と郊外とを結ぶ鉄道や交通網、駐車場、道路状況の改善も訴えられた。

現に進められているリバーフロント西地区の再開発については、あまりその重要性が認識されておらず、スタジアム開発に対する代替案が述べられた。それは、手頃な集合住宅やアパートなどの住宅開発や、キャンプ場やレクリエーション施設、駐車場といったものである (267-268)。スタジアムは特定の者にとっては魅力的な空間かもしれないが、一般市民からすれば、利用は限られるのではないかというものであった。

コミュニティとスポーツとの関係については、次のような見解が述べられた。まずスタジアム建設問題については、多くの者が反対であると述べ、当初賛成した者も今なら反対に回るだろうと述べたという (268)。もちろん、莫大な税の投入と、それに伴う費用負担の問題もある

のだが、それ以上に大きかったのが再開の優先順位に対する認識である。実際のところ、調査対象者達は、プロスポーツに批判的な人々ではなく、むしろプロスポーツに関心を抱いている人々であった。Smith & Inghamは、ここに「都市の文脈におけるスポーツへのより批判的理解」(268)をみている。すなわち、「もしスポーツが、本当に、地区の住民間の結びつきの少なさを埋める解毒剤なら、そのとき、彼らは、コミュニティ内でスポーツが機能でき、そして『彼らを一緒に』し続ける諸活動に賛成するであろう」(268)、と。対象者達は、間違いなくレッズがシンシナティの地域的感覚に貢献してきたことを認める。けれども、こうしたチームの貢献をつきつめていったとき、「アイデンティティの感覚や一般のすべてのファンよりも、人々の間の仲間意識を引き出すつながりの少なさ」(269)の方がより強く示唆されていった。Smith & Inghamは、「社会関係資本と象徴的資本を融合させようとするイデオロギー的試みは、回答者達をあざむくことはできなかった」(269)という。それは、対象者達が、一つには、「持たざるもの」から「持てるもの」への経済資本の移転を明らかに認識していること、もう一つは、ファンであることと、場所という地域的感覚をもったコミュニティの一員であることを明確に区別していたからだとしている(269)。つまり、ファンとしての勝利の喜び、都市の誇りといったものは、価値ある貢献であるかもしれないが、それは「想像されたコミュニティ」と同じではない、ということである。それは自発的で一時的なコミュニティではあっても、「永続的基盤の上に、人々の間のより大きな連帯を引き起こしてはいない」(269)のである。Wirthが述べた「よそ者嫌い」も乗り越えない。

以上を通じ、Smith & Ingham、「スポーツはコミュニティを一体化することができるのか」(270)といった問いの回答を用意する。

第一に彼らは、都市の政治的エコノミーとも関連して、意志決定過程の問題をあげる。これらは、ごく少数のエリート集団によってもたらされるが、多様な従属集団がこれらに影響を与えたいと考えても「ことは既に終わっている」(270)というものである。加えて、ラグジュアリーボックスなどの急増にみられるように、消費主義的傾向の昂進は、観客の再構築をますます助長する(実際平均的市民が気軽にゲームを見に行けない水準にまで達している)ものであった(270)。シンシナティは、125年以上前からの「メジャーリーグ都市」である。もし『「スポーツがコミュニティを(再)生することができる』といった主張が現実味のあるものなら、人々は、シンシナティが、あらゆる点でそして地域中が堅い編み目のコミュニティとなり、これらチームの魔法を働かせ、おそらく他のどの都市よりもシンシナティを統合的で堅く結びつけられた都市にさせようとする人々のつながりを育む、チームの長期的存在を期待するだろう」(270)、と。しかし、事実是这样ではない。住民が述べる結びつきは、近隣地区のそれであり、「全体としてのシンシナティ」に向かうより強い、というのが結果であった。

第二に、「人々を一緒にさせ彼らの間の社会的絆を改善することよりむしろ、スタジアム問題は、あらゆる事例において、人々を伝統的そしてそんなに伝統的でないものへと引き離すとされる」(271)。よって、こうした分裂した状況の中で、プロスポーツが「コミュニティの絆」になることはできないことになる。結果的に、「とくに人種、階級、そしてコミュニティの線によって都市を分断する他の差し迫った問題があるとき、プロスポーツがコミュニティを(再)生することができるという(理論的、または経験的)支持はないと思われる」(271)のである。

5 まとめにかえて

最後に、Johnson, 及びInghamらの論考から明らかになった諸点を指摘することで、まとめにかえたい。

まず第一に、Johnsonの事例が示すとおり、マイナーリーグスタジアム建設には、多様な主体（行政諸機関、オーナー、開発ディベロッパー、企業、金融機関など）が入り組み、それがまた多様な利害の上に成り立っているという点である。ここには、Inghamらが述べるところの政治的エコノミーが作動し、多様な権力の導線が引かれることになる。しかし、一般住民が主体として登場してこないこと、不在であることは強調されてよい。また、こうした事業の達成を通じ、極めて手段的な意味において行政手法が鍛錬されていったことも指摘される。例えば、「学問的研究の見解は、開発プロジェクトに批判的であるが、中心商店街プロジェクトへの反対は〔実際の〕地域に基礎を置いていないのである。……(中略)……行政職員は、住民生活を脅かさない場所を見つけ、そして予算外の資金を利用することによって〔つまり公債発行に伴う住民投票の回避といった手段を通じて〕、再開発への反対を避けることを学習している」(Johnson 1995:176. []内および傍点筆者)のであった。ともあれその背景には、公共／民間企業の相互浸透と熾烈な都市間競争といった事態があったことを確認しておきたい。

第二に、この点がもっとも大きな点であるが、Inghamがみていた社会の認識である。誤解を恐れずにいえば²³、それはポスト・フォーディズム社会におけるプロスポーツ・コミュニティ論であったと考えられる。つまり、彼が強調するのは、「資本蓄積の論理」、「生産者－消費者関係の変容」であり、こうした文脈の中にプロスポーツとコミュニティ関係をセットすることであった。だからInghamは、かかる作業を行うのは、けして「還元主義者ではない」(Ingham, et al. 1987:427)と断ずるのであった。

彼がみていたのは、フォーディズム的な比較的安定した生産や階級関係、スポーツにおける「文化的モデルの中へと結晶化された階級関係」(ibid. 451-452), およびそうした都市の「成長」の文脈が、ポスト・フォーディズムへと移行するとき、全面的な消費主義傾向の昂進、柔軟な蓄積、以前の階級によって必ずしも組織し得ない分節化された人々、あるいは諸コミュニティの出現、これらに即応し収益力を増強するスタジアム（ラグジュアリーボックス等）、そして都市間「競争」文脈への移行であった。これらをプロスポーツに置き換えれば、その発端にあった「埋め込まれた経済構造」から「自律的経済構造」(フォーディズム)への移行、すなわち、社会的空間から抽象的空間への移行がその画期をなしていた。そしてそれは、フランチャイズ(人為的に作られた稀少性)をめぐる都市間競争とラグジュアリーボックスを備えたスタジアム建設(ポスト・フォーディズム)へと加速しつつある。こうした枠組みが、三つの論文を大きく貫いていたと理解される。

第三に、この大きな枠組みのもとでのプロスポーツ・イデオロギーの問題である。

Inghamの論理展開は、およそ次のようなものであった。コミュニティスの条件(平等な条件)を今日支えているのは、全面的に商品化された世界である(消費主義の進展)。商品を媒介に皆平等になってきている。それはスポーツの文脈でいえばプロスポーツの寡占化によって達成されてきている。ここに出現するのは全人格的な実存的ないし自然発生的コミュニティスでなく、イデオロギー的コミュニティス(貼られたラベル)となるのは必然的である、と。Inghamは、こうしたイデオロギー的側面をTurnerの「魔術的」^{マジカル}という言葉をあえて引くことで、反語的に

露出させていったかのようにみえる。そして、Inghamが創造した「市民的儀礼」(プロスポーツ)が、こうした過程で都市に埋め込まれていったとみることができる。ここでは、Giddensのいうモダニティの脱埋め込みの過程(ギデンズ1993:35-44)や、社会空間から抽象空間へのプロスポーツの移行の相即性、コミュニティと社会構造の組み合わせを考える権力論(どのように組み合わせがなされていくのか=政治的エコノミー)が焦点化される。

最後は、コミュニティの問題である。ここには、近年の理論家達によるコミュニティ(論)の姿が映し出される。あえて、これらをスポーツの文脈に引き寄せていえば、松村が指摘した(松村2006:10-11)、スポーツ・アソシエーション論(海老原2000;森川2002)、スポーツと公共性論(菊2001)、地域参加型のNPO論(中島2000)の展開と奇しくもオーバーラップすることになる。

Inghamは、ポスト・フォーディズムでのコミュニティと(プロ)スポーツに関して、必ずしも有効な展望を描いているわけではない。また、解決のためのプログラムを用意しているわけでもない。むしろその悲観の見通しの中で、大きな宿題を残したものと考えられる。あえてその回答をInghamに求めるとすれば、社会関係資本(Putnam)やコミットメント(Sennett; Bellah, et al.)といったコミュニティの質的側面を丹念に追うことであるように思える。こうした質的側面をスポーツへと投げかけ、日本各地でのプロスポーツと「地域発展」を展望するとき、そこに浮上してくるのが、アソシエーションとしての人々の結合なのか、公共性を育む親密な関係なのか、NPO論なのかは残された課題である。もちろん、日本各地におけるプロスポーツへの取り組みは、Inghamがみたものと完全に一致するものではない。こうした点も明らかにしながら、(プロ)スポーツーコミュニティ関係を読み解いていったときに初めて、Inghamにボールを投げ返すことができるのでないかと筆者らは考える。

[付記]

本研究は、平成18年度科学研究費補助金基盤研究(C)「集客スポーツを利用した都市活性化と地域変動：中核都市と周辺部に着目して」(課題番号：18600001、研究代表者：大沼義彦)の一部である。

注

¹ さらにまた札幌市では2007年秋、男子プロバスケットボールチーム(レラカムイ北海道)が誕生する予定であるという(北海道新聞2006年11月29日)。

² Alan G. Ingham(1947-2005)については、McKay(2005)を参照。

³ ただし、筆者らは、Johnsonの結論部分にはやや難があると考えている。Johnsonは、「マイナーリーグスタジアムの成功の評価は、どのように地域の生活の質を高めるかと同様、地域の経済発展全体の文脈の中で考えられなければならない」としながら、「この文脈の中でマイナーリーグスタジアムは、重要な経済発展の役割を演じることができることを示してきた」(Johnson 1995:253)と評価する。しかし、それは例えば「収入を最大化しコストを削減する」(ibid. 248)といったあくまで手段合理的な解決に依存したままである。Johnsonが描写してきた諸都市の姿がこうした手法のみによって問題を解決しうるかには疑問が残る。

⁴ 本稿にあっては、マイナーリーグ研究については長津が担当し、Inghamの諸論考については大沼が担当した。それ以外は、両者で検討を行い、大沼が執筆した。

⁵ 2006年現在では、Triple-Aが3リーグに変更されている。

⁶ 基本的に、本拠地を中心としてある一定区域内への他チームの移転は認められない。チームの商業圏とでも

- いったところだろうか。調査が行なわれた頃の1991年は35マイル以内だった。
- ⁷ 例えば河北新報では、新球団誕生に伴って、宮城県・仙台市で見込まれる経済効果について話題になっている（2004年11月5日、2005年10月25日など）。
- ⁸ 研究者だけでなく、自治体の担当者も認識している。千葉（2006）が指摘するのは、人々がチームに投資すると、その分他の娯楽への投資が減少するという点である。つまり、地域の外からの収入が得られなければ地域全体の経済効果は上がらない。しかし同氏の調査によると、現実には観戦者のほとんどが県内の住民である。
- ⁹ Indianapolisのチームについて補足すると、数十年前から本拠地を構えており、主に地元の個人株主で構成されていた。しかし時が経つにつれて関心が薄れ、人々は株の存在を忘れてたりなくなったりして、議事の定足数の問題に発展したという（Johnson 1995:72-73）。
- ¹⁰ Friden & Sagalyn (1989)によると、予算外の資金を使うというような、将来起こるかもしれない問題を隠すことができるような手段を用いて人々を新しい事業に同意させる方法を、エコノミストのHirschmanは“hiding hand”と名づけている（Friden & Sagalyn 1989:249-250）。
- ¹¹ Smith & Ingham (2003)もファンとそれ以外の住民の間に生じる意見の相違を指摘している（Smith & Ingham 2003:271）。
- ¹² 同論文は、後にSchimmel, et al. (1993)としてリライトされている。
- ¹³ この論文のみcommunitiesと複数形で表記されている。それまでの論文が単数形、つまり一般化されたコミュニティを論じるのに対し、ここでは個別具体的コミュニティを論じている。
- ¹⁴ Inghamは、年中行事のような市民一般にみられる儀礼(civil ritual)と区別している(Ingham, et al. 1987:458-459)。
- ¹⁵ 実際、この論文の一部は、1986年の第8回コモンウェルス兼スポーツ・体育・ダンス・レクリエーション・健康国際会議と1984年のオリンピック科学会議で報告されている(Ingham, et al. 1987:462)。
- ¹⁶ 生産者-消費者関係の変容が、北米スポーツ研究者集団の中では入念に検討されてこなかったことが問題であるとする。例えば、スポーツ史家のほとんどが、「観戦者症(spectatoritis)」の成長の結果として都市化と産業化とに注目してきたこと、スポーツ経済学者達が一般的に歴史的/環境的結果としての分析を無視し、プロスポーツ内部における支配的な経済的契約がどのように直接的間接的消費と資本-労働関係に影響を及ぼすのかに留意してきたこと等である。関連する下位学問分野の断片化が、一つの知的欠陥を生み出してきたのではないかとIngham, et al.は考えている(Ingham, et al. 1987:428)。
- ¹⁷ 例えば、アメリカン・フットボールでは、1929年設立のDayton Trianglesが、1930年Brooklyn Dodgersになり、1940年にBrooklyn Tigersになり、それが1945年にBoston Yanksと合併し、1949年New York Bulldogsとなり、1950年にはNew York Yanksになり（そして1951年にもがき苦しんでいたNew York Coltsから多くのキープレイヤー達が加わり）、1952年Dallas Texansになり、ついに1953年Baltimore Coltsとして生まれ変わった。そしてそれは1984年に移転してIndianapolis Coltsとなった。また、選手も同様に、頻繁に移動したという。Ingham, et al.は、6週間のそれぞれの日曜日に、6つの違うチームで、6つの違う名前前でプレイした、という殿堂入りしたEarle (Greasy) Nealeの言葉も引用している(Ingham, et al. 1987:430-431)。
- ¹⁸ 彼らが検討するのは、Ferdinand Tonnies, Emile Durkheim, Max Weber, Charles Horton Cooley, Louis Wirth, Georg Simmel, Richard Sennett（そしておそらく、Robert N. Bellah）の諸理論である(Ingham, et al. 1987:452-453)。
- ¹⁹ それはまた矛盾した関係でもある。例えばSennettは次のように述べている。「人々がお互いに感情面で開放的でありながら、同時にお互いをコントロールしようとする役割である。この矛盾の結果は、見たところ敵意のある環境のなかでの兄弟愛の実践と思える地域のコミュニティ生活の経験が、しばしば兄弟殺しの実践となることである」(セネット 1991:417)。
- ²⁰ Robert N. Bellahについては、浅川（1995）も参照されたい。
- ²¹ Putnamは、次のように述べている。「社会的なつながりという観点からは、この新たな組織は古典的な『二次集団』とは大きく異なっており、新たな名称—おそらくは『三次集団』—を付ける必要がある。その会員の大多数にとって、唯一の会員活動とは会費の小切手を切ることか、時折ニュースレターに目を通すことである。……（中略）……。全米野生生物連盟や全米ライフル協会の任意の二会員の間の絆は、ガーデ

- ニングクラブや祈祷会の二会員の間の絆のようなものではなく、むしろ東西海岸に分かれた二人のヤンキースファン（や、おそらくは熱心なL. L. ピーンのカタログ利用者）の間の絆に近い—すなわち、同じ利害関心の幾分かを共有しているは互いの存在には気づかないのである。その紐帯は共通の象徴、リーダー、おそらくは共有された理想とつながってはいるが、互いを結びつけてはいない。」（パットナム 2006:57）
- ²²ただし、Smith & Inghamはシンシナティの人種的、エスニック・グループの偏りを反映することができていない点で、限界があるとしている（Smith & Ingham 2003:263）。
- ²³筆者は、Ingham & McDonaldが、モダニティに言及しながら、フォーディズムからポスト・フォーディズムへの移行を論じていたと判断するが、こうした点においても、産業社会をめぐる連続/非連続のどちらを強調するかによって、文化の問題と政治的エコノミーの問題を扱うスタンスが異なるという。実際のところ、彼らは、これらを相即的に捉えるのに都合の良い述語を欠いているとしている（Ingham & McDonald 2003:31）。

文 献

- アンダーソン, B. 著／白石隆・白石さや訳（1987）『想像の共同体』, リプロポート. (Anderson, B. (1983) *Imagined communities: Reflections on the origin and spread of nationalism*, Verso.)
- 浅川和幸（1995）R. N. ベラーとE. デュルケム—R. N. ベラー著『デュルケムと歴史』を素材に. 北海道大学教育学部紀要 65: 207-218.
- Baade, R A., and Dye, R F. (1988) Sports stadiums and area development: A critical review. *Economic Development Quarterly* August: 265-275.
- (1990) The impact of stadiums and professional sports on metropolitan area development. *Growth and Change* Spring: 1-14.
- Bauman, Z. (2001) *Community: Seeking safety in an insecure world*, Polity Press.
- Bélanger, A. (2000) Sport venues and the spectacularization of urban space in North America: The case of the Molson Center in Montreal. *International Review for the Sociology of Sport* 35 (3):378-397.
- ベラー, R. N. 他著／島藺進・中村圭志共訳（1991）『心の習慣—アメリカ個人主義のゆくえ』, みすず書房. (Bellah, R N., et al. (1985) *Habits of the heart: Individualism and commitment in American life*, University of California Press.)
- 海老原修（2000）地域スポーツのこれまでとこれから—コミュニティ型スポーツの限界とアソシエーション型スポーツの可能性. 体育の科学 50 (3):180-184.
- 千葉幸太郎（2006）プロ野球と地域振興. 月刊自治フォーラム 559:30-35.
- Essex, S. and Chalkley, B. (1998) Olympic games: Catalyst of urban change. *Leisure Studies* 17:187-206.
- Frieden, B J. and Sagalyn, L B. (1989) *Downtown, Inc.: How America Rebuilds Cities*, The MIT Press.
- Friedman, M T., Andrews, D L. and Silk, M L. (2004) Sport and the façade of redevelopment in the postindustrial city. *Sociology of Sport Journal* 21: 119-139.
- ギデンズ, A. 著／松尾精文・小幡正敏訳（1993）『近代とはいかなる時代か?—モダニティの帰結』, 而立書房. (Giddens, A. (1990) *The consequences of modernity*, The Board Trustees of the Leland Stanford Junior University.)
- ホール, C M. 著／須田直之訳（1996）『イベント観光学—イベントの効果, 運営と企画』, 信山社. (Hall, C M. (1992) *Hallmark tourist events*, John Wiley & Sons.)
- 原田宗彦（2002）『スポーツイベントの経済学—メガイベントとホームチームが都市を変える』, 平凡社.
- Heitzman, J. (1999) Sports and conflict in urban planning: The Indian National Games in Bangalore. *Journal of Sport and Social Issues* 23 (1): 5-23.
- Henry, I. and Gratton, C. (2001) Sport in the city: Research issues. In Gratton, C. and Henry, I. eds. (2001) *Sport in the city: The role of sport in economic and social regeneration*, Routledge, pp. 3-11.
- Henry, I. and Paramio-Salcines, J. L. (1999) Sport and analysis of symbolic regimes: A case study of

- the City of Sheffield. *Urban Affairs Review* 34 (5): 641-666.
- Horn, J. D. and Manzenreiter, W. (2004) Accounting for mega-events: Forecast and actual impacts of the 2002 Football World Cup Finals on the host countries Japan/Korea. *International Review for the Sociology of Sport* 39 (2): 187-203.
- Ingham, A. G., Howell, J. W. and Schilperoot, T. S. (1987) Professional sports and community: A review and exegesis. *Exercise and Sport Sciences Reviews* 15: 427-465.
- Ingham, A. G. and McDonald, M. G. (2003) Sport and community/communitas. in Wilcox, R. C., Andrews, D. L., Pitter, R. and Irwin, R. L. eds. (2003) *Sporting dystopias: The making and meaning of urban sport cultures*, State University of New York Press, pp. 17-33.
- Jarvie, G. (2004) Sport in changing time and places. *The British Journal of Sociology* 55 (4): 579-586.
- Johnson, A. T. (1995) *Minor league baseball and local economic development*, University of Illinois Press.
- Judd, D. and Parkinson, M. (1989) Urban revitalization in America and the UK. In Parkinson, M., Foley, B. and Judd, D. eds. (1989) *Regenerating the cities: The UK crisis and the US experience*, Manchester University Press, pp. 1-8.
- 上條典夫 (2002) 『スポーツ経済効果で元気になった街と国』, 講談社.
- Kidd, B. (2002) The global sporting legacy of Olympic movement. (A paper presented to the symposium on the Legacy of Olympic Games: 1984-2000, Olympic Museum and Studies Centre, Lausanne, Switzerland, November 13-16.)
- 菊幸一 (2001) 体育社会学からみた体育・スポーツの「公共性」をめぐるビジョン. *体育の科学* 51 (1): 25-29.
- 小岩井善一 (1994) サッカーによるまちづくり—「工業のまち」から「若者が定着する楽しいまち」へ. *都市問題* 85 (12): 59-69.
- 町村敬志 (1999) 「豊かさ」の語り方の行方—「地域開発」という思考の転機. *都市問題研究* 52 (2): 78-108.
- 増田聡 (2000) 東京オリンピックと首都改造. 吉原直樹編 (2000) 『都市経営の思想—モダニティ・分権・自治』, 青木書店, pp. 113-136.
- 松村和則 (2006) 白いスタジアムのある風景—「開発とスポーツ」研究序説. 松村和則編『メガ・スポーツイベントの社会学』, 南窓社, pp. 5-19.
- McKay, J. (2005) In memoriam: Alan G. Ingham, 1947-2005. *International Review for the Sociology of Sport* 40 (3): 283-284.
- Minor League Baseball 公式ホームページ <http://www.minorleaguebaseball.com/>
- Mondello, M. J. (2003) Stadium funding and the City of Jacksonville. *International Sports Journal* 7 (2): 91-98.
- 森川貞夫 (2002) コミュニティ・スポーツ論の再検証. *体育学研究* 47 (4): 395-404.
- 中島信博 (2000) 総合型地域スポーツクラブの展開と地域社会の基盤—岩手県金ヶ崎町でのききとりから. 日本体育学会第50回記念特別委員会編 (2000) 『21世紀と体育・スポーツ科学の発展—日本体育学会第50回記念大会誌 1』, 杏林書院, pp. 126-130.
- 大西隆 (1994) スポーツと地域活性化. *都市問題* 85 (12): 3-14.
- 大沼義彦 (2006) 都市とメガ・スポーツイベント研究の視角—都市の社会構造とスポーツに着目して. 松村和則編 (2006) 『メガ・スポーツイベントの社会学—白いスタジアムのある風景』, 南窓社, pp. 20-40.
- Puig, N. and Ingham A. (1993) Sport and space: An outline of the issue. *International Review for the Sociology of Sport* 28 (2+3): 101-106.
- バットナム, R. D. 著/柴内康文訳 (2006) 『孤独なボウリング—米国コミュニティの崩壊と再生』, 柏書房. (Putnam, R. D. (2000) *Bowling alone: The collapse and revival of American community*, Simon & Schuster.)
- Roche, M. (1992) Mega-events and micro-modernization: On the sociology of the new urban tourism. *The British Journal of Sociology* 43 (4): 563-600.
- (2000) Mega-events and modernity: *Olympics and expos in the growth of global culture*, Routledge.

- Row, D. and McGuirk, P. (1999) Drunk for three week : Sporting success and city image. *International Review for the Sociology of Sport* 34 (2) :125 -141.
- 佐藤学 (1998) 米国都市とスポーツ—ピッツバーグ市の事例より. 自治総研 24 :52-65.
- Schimmel, K S., Ingham, A G. and Howell, J W. (1993) Professional team sport and the American city : Urban politics and franchise relocation. In Ingham, A G. and Loy, J W. eds. (1993) *Sport in social development : Traditions, transitions, and transformations*, Human Kinetics, pp.221 -244.
- Schimmel, K S. (2001) Sport matters : Urban regime theory and urban regeneration in the late -capitalist era. In Gratton, C. and Henry, I. eds. (2001) *Sport in the city : The role of sport in economic and social regeneration*, Routledge, pp.259 -277.
- セネット, R. 著／北山克彦・高階悟訳 (1991) 『公共性の喪失』, 晶文社. (Sennett, R. (1977) *The fall of public man*, Cambridge University Press.)
- Silk, M L. (2004) A tale of two cities : The social production of sterile sporting space. *Journal of Sport and Social Issues* 28 (4) : 349 -378.
- 鳥倉孝之・西村幸夫 (1996) 国際スポーツイベント開催と都市整備に関する研究—選手村の整備が周辺の郊外部の計画に編入される過程について. 日本都市計画学会学術研究論文集31:721-725.
- Smith, J M. and Ingham, A G. (2003) On the waterfront : Retrospectives on the relationship between sport and communities. *Sociology of Sport Journal* 20:252 -274.
- 須田直之 (1994) 地域社会におけるスポーツの役割. 都市問題 85 (12) :15 -26.
- 杉本尚次 (1999) ベースボール・スタジアムと都市環境—スポーツ地理学. 人文論究49 (1) : 1 -19.
- Tomlinson, A., Markovits, A S. and Young, C. (2003) Mapping sports space. *American Behavioral Scientist* 46 (11) :1463 -1475.
- ターナー, V. 著／富倉光雄訳 (1976) 『儀礼の過程』, 思索社. (Turner, V W. (1969) *The ritual process : Structure and ant-structure*, Aldine Publishing Company.)
- ／梶原景昭訳 (1981) 『象徴と社会』, 紀伊国屋書店. (Turner, V. (1974) *Dramas, fields, and metaphors : Symbolic action in human society*, Cornell University Press.)
- 内海和雄 (1994) スポーツ政策の現状と課題. 都市問題 85 (12) :27-41.
- 牛木素吉郎・黒田勇 (2003) 『ワールドカップのメディア学』, 大修館書店.
- Van Ingen, C. (2003) Geographies of gender, sexuality and race : Reframing the focus on space in sport in sociology. *International Review for the Sociology of Sport* 38 (2) :201 -216.
- Websterbeek, H M., Turner, P. and Ingreson, L. (2002) Key success factors in bidding for hallmark sporting events. *International Marketing Review* 19 (2/3) : 303 -322.
- 黄順姫編 (2003) 『W杯サッカーの熱狂と遺産』, 世界思想社.
- Whitson, D. and Macintosh, D. (1993) Becoming a world -class city : Hallmark events and sport franchises in the growth strategies of western Canadian cities. *Sociology of Sport Journal* 10:221 -41.
- (財) 自治体国際化協会 (1997) 『スポーツ施設と地域政策—アメリカにおけるスポーツ施設・プロスポーツ・行政の関係』, (財) 自治体国際化協会 CLAIR REPORT 152.